秋田県文化財調査報告書第212集

和田遺跡発掘調査報告書

―― 県道協和・松ヶ崎線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査 ――

1991・3

秋田県教育委員会

和田（わだ）遺跡発掘調査報告書

―― 県道協和・松ケ崎線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査 ――

1991・3

秋田県教育委員会

序

豊かな自然に恵まれた秋田県には、我々の先人達が営々と築き上げてきた歴史があります。地中に残された埋蔵文化財もその歴史遺産の一つであります。

このたび、県道協和・松ケ崎線緊急地方道路整備工事に係り、協和町上淀川に所在する和田遺跡の発掘調査を実施しました。

その結果、弥生時代後期の焼土遺構・柱穴状ピット、縄文～弥生時代と考えられる陥し穴様の円形土坑・フラスコ状土坑などの遺構のほか、弥生時代後期を主とし、縄文時代後期～晩期の遺物を検出できました。遺物の中で弥生時代の土製紡錘車の出土は、県内では数少く貴重なものであります。

本書はこれらの成果をまとめたものであり、地域の歴史の解明と文化財に対する理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後に、本調査及び報告書作成に際し、ご協力いただきました秋田県土木部仙北土木事務所、協和町教育委員会はじめ関係機関、各位に対し深く感謝の意を表します。

平成３年２月15日

秋田県教育委員会

教育長　橋本　顕信

例　　言

1　本報告書は県道協和・松ケ崎緊急地方道路整備事業に係る和田遺跡発掘調査報告書である。

2　本調査及び報告書作成にあたり、下記の方々から御助言、御指導を賜った。

長山幹丸、伊藤攻

安保彰、高田和徳、村田晃一、相沢清利

3　報告書の執筆は高橋　学が行い、石川真一の協力を得た。

凡　　例

1　検出遺構に使用した略号は次の通りである。

SN（焼土遺構）　SK（土坑）　SKF（フラスコ状土坑）　SX（炭窯）

2　遺構平面図、断面図の縮尺は1/40、遺構配置図は1/400である。

3　遺物実測図、拓影図の縮尺は土製品・剥片石器が1/2、その他は1/2.5である。

4　出土遺物は、種別・器種を問わず一連の番号を付し、挿図、写真図版とも対応できるように統一してある。

5　土層註記における色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修による『新版標準土色帖』に準拠している。

6　図版１で使用した航空写真は、秋田県土木部仙北土木事務所より提供を受けた。

7　挿図中に使用したスクリーントーンは、以下の通りである。

地山　　擦り

焼土　　敲打(凹)面　　磨面

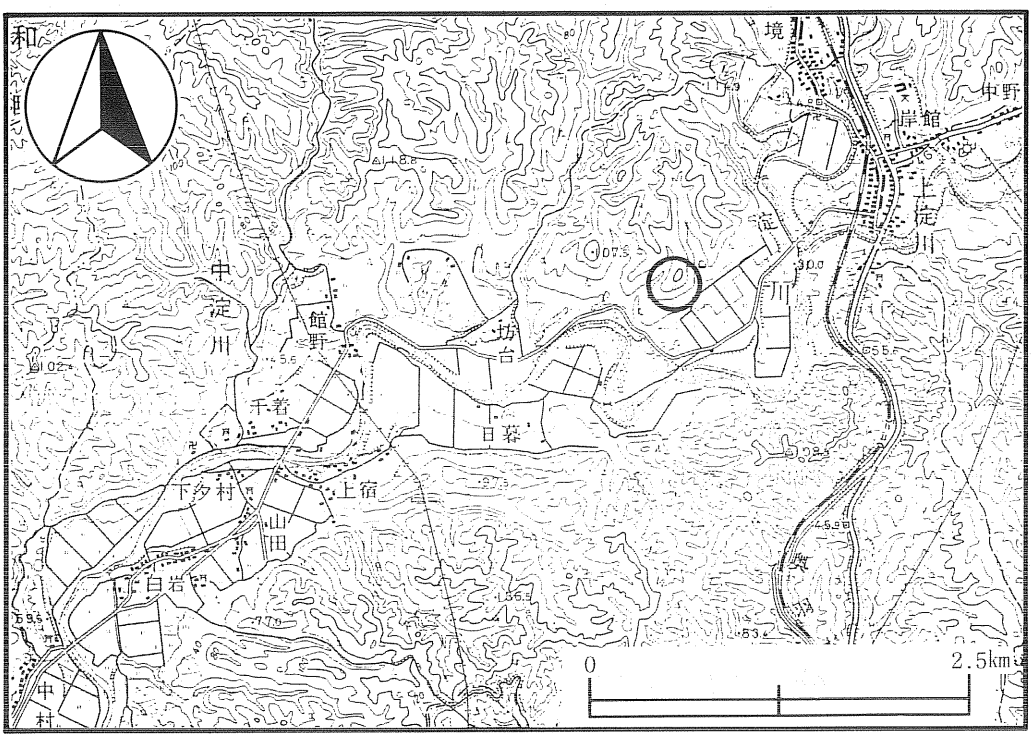
目　　次

序
例言
凡例
目次

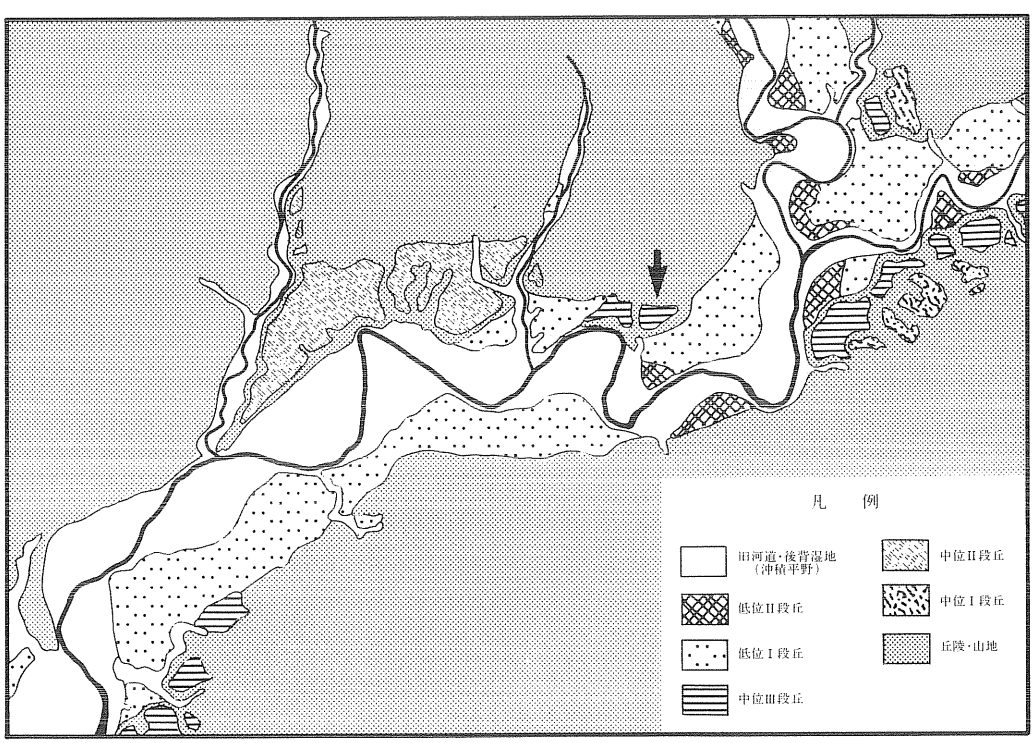
第１章　はじめに …… 1
　第１節　発掘調査に至るまで …… 1
　第２節　調査の組織と構成 …… 1
第２章　遺跡の立地と環境 …… 2
　第１節　遺跡の位置と立地 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 2
第３章　発掘調査の概要 …… 5
　第１節　遺跡の概観 …… 5
　第２節　調査の方法 …… 6
　第３節　調査経過 …… 6
第４章　調査の記録 …… 8
　第１節　検出遺構と遺物 …… 8
　第２節　遺構外出土遺物 ……14
第５章　まとめ ……27
図版１～10

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図
第２図　遺跡周辺地形区分図
第３図　周辺遺跡分布図
第４図　遺跡（調査区）の位置及び地形図
第５図　遺跡基本土層図
第６図　遺構配置及び地形図
第７図　弥生時代の遺構と周辺出土の土器
第８図　現代の遺構と周辺出土の遺物
第９図　時期不明（縄文～弥生）の土坑
第10図　時期不明（縄文～弥生）のフラスコ状土坑
第11図　遺物出土地点図
第12図　出土遺物（１）　土器（１）
第13図　出土遺物（２）　土器（２）
第14図　出土遺物（３）　土器（３）
第15図　出土遺物（４）　土器（４）
第16図　出土遺物（５）　土製品、石器（１）
第17図　出土遺物（６）　石器（２）
第18図　出土遺物（７）　石器（３）
第19図　秋田県内出土の弥生時代の紡錘車



第１図　遺跡位置図



第２図　遺跡周辺地形区分図

第１章　はじめに

第１節　発掘調査に至るまで

県道協和・松ケ崎線は、協和町境と本荘市松ケ崎を東西に結ぶ主要地方道路である。本道路は協和町中淀川地内で東北横断自動車道協和インターチェンジに接続し、この協和インターチェンジ及び秋田空港へのアクセス道路として整備が急がれている。

工事の主体である仙北土木事務所は、計画路線が決定した段階で当該区内において「埋蔵文化財包蔵地」が存在するか否かの照会を秋田県教育委員会に行っている。調査担当である教育庁文化課は昭和63年４月、６月に路線内の分布調査を実施した結果、周知の遺跡３箇所、新発見の遺跡２箇所存在することを回答した。

この結果に基づいて、秋田県教育委員会と仙北土木事務所は、遺跡保存の協議を行い、遺跡範囲確認調査を行って、記録保存の必要な遺跡については発掘調査を実施することとした。これを受け、昭和63年８月に行った遺跡範囲確認調査により、周知の遺跡２箇所（和田の台Ⅰ、唐松林館）については、路線内に遺跡が及ばないことを確認し、新発見の１箇所（未命名）は、試掘の結果調査の必要がないと判断された。

これにより発掘調査の必要な遺跡は、周知の遺跡である五百刈田遺跡と新発見の和田遺跡の２箇所に確定した。前者については、平成元年に発掘調査を実施、平成２年に調査報告書を刊行している。和田遺跡は用地買収の関係で遅れ、平成２年４月の範囲確認調査の後、同年５月から発掘調査を行ったものである。

第２節　調査の組織と構成

所　在　地	秋田県仙北郡協和町上淀川字和田149
調査期間	平成２年５月21日～６月22日
調査目的	県道協和・松ケ崎線緊急地方道路整備事業に係る事前調査
調査面積	1,000㎡
調査担当者	高橋　　学　（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）
	石川　真一　（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
総務担当者	佐田　　茂　（秋田県埋蔵文化財センター主査）
	高橋忠太郎　（秋田県埋蔵文化財センター主事）
調査協力機関	秋田県土木部仙北土木事務所　協和町教育委員会

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の位置と立地

和田遺跡は、秋田県中央部の仙北郡協和町上淀川に所在する。遺跡の位置は、JR奥羽本線羽後境駅の南南西約2.5km、上淀川集落の西約1.3kmである。

本遺跡は、その南を大きく蛇行しながら西流する雄物川の支流淀川が形成した右岸段丘上に立地している。この段丘は、地形区分では中位Ⅲ段丘と称されている。調査区での標高は46～50ｍであり、北から南に緩く傾斜している。

遺跡の立地している段丘面は、地質的には新第三紀天徳寺層に含まれ、岩相は、石灰質団塊を伴う細粒砂岩となっている。

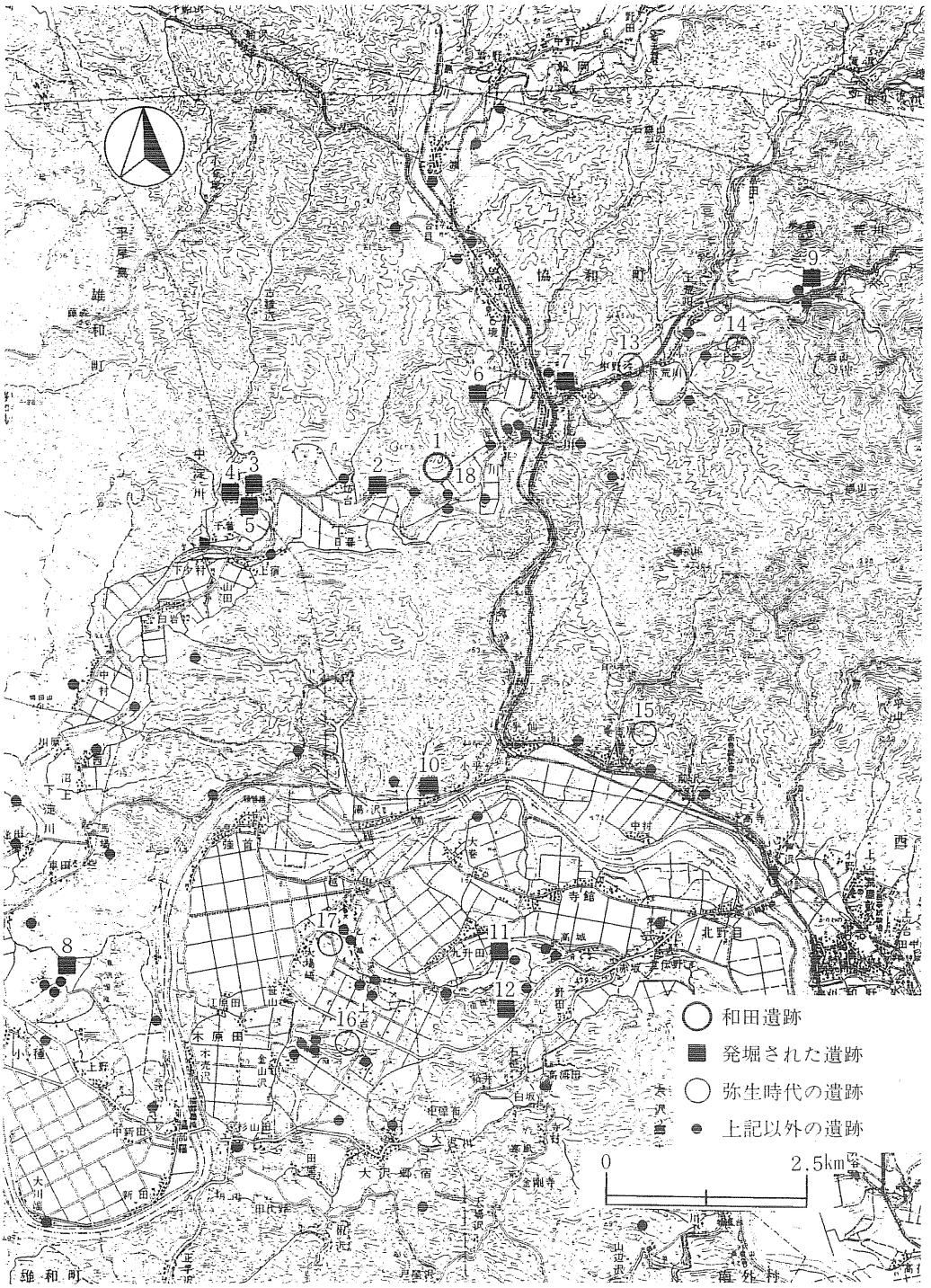
第２節　歴史的環境

和田遺跡の所在する協和町は、旧石器時代の遺跡として全国的に著名な米ケ森遺跡をはじめ、県内でも有数の遺跡の多い町である。第３図に示した図幅（東西約10km、南北約14km）に収まる範囲内（協和町、西仙北町）に特定しても88遺跡が周知されている。

本節ではこれらの遺跡のうち、発掘調査の行われた遺跡（第３図１～12)、和田遺跡と同時代である弥生時代の遺物の採集されている遺跡（同13～17）を第１表に一覧し、歴史的環境に代えることとしたい。なお、発掘調査が行われた遺跡のうち、２の五百刈田遺跡は和田遺跡同様の県道整備事業に伴う調査として県教育委員会が、３～５、10～12は、東北横断自動車道建設に伴う調査として県教育委員会が、６～８は協和町教育委員会で、９は協和町教育委員会と県教育委員会による調査である。

第１表　主な周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	時　　代	番号	遺跡名	所在地	時　　代
1	和田	協和町上淀川	縄文･弥生･現代	10	半仙	協和町峰吉川	縄文･弥生
2	五百刈田	協和町上淀川	縄文･弥生	11	寺沢	西仙北町九升田	縄文･平安･近世
3	館野	協和町中淀川	縄文	12	上野台	西仙北町強首	縄･弥･平･中世
4	上ノ山Ⅰ	協和町中淀川	縄文	13	下谷地	協和町荒川	縄文･弥生
5	上ノ山Ⅱ	協和町中淀川	縄文	14	上野崎	協和町荒川	弥生
6	唐松城	協和町境	中世	15	中沢	協和町峰吉川	弥生
7	岸館	協和町境	旧石器･縄文･中世	16	上ノ台Ⅵ	西仙北町強首	弥生
8	木形台Ⅱ	協和町小種	縄文	17	上ノ台Ⅹ	西仙北町強首	弥生
9	米ケ森	協和町荒川	旧石器・縄文	18	和田の台Ⅱ	協和町上淀川	縄文･平安


和田遺跡
発掘された遺跡
弥生時代の遺跡
上記以外の遺跡
0
2.5km
協和町
雄和町
南外村
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18

第３図　周辺遺跡分布図

第４図　遺跡（調査区）の位置及び周辺地形図

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

和田遺跡は、雄物川の支流淀川の右岸中位III段丘上に立地している。同段丘には南から幾筋もの沢が入り込み、調査区（東西約60ｍ、南北約17ｍ、第４図参照）内でも３本の沢を確認でき、これらにより画された２つの小さな舌（台）状台地が作り出されている。このうち西側の台地は、その先端部が、東側のそれは基部に近い箇所がそれぞれ調査区内に収まっている。遺構・遺物は主に台地部―特に東側の台地―で検出され、沢部では遺物もほとんど見い出すことができなかった。

遺跡の現況は、ナラを主とする雑木林であり、一部に杉の植栽、サクラ、ホウノキなども自生している。

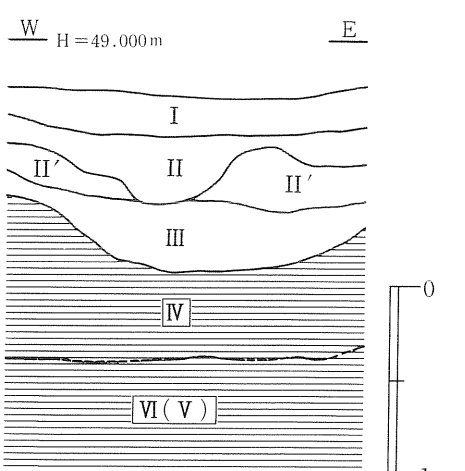
遺跡の基本層位は、調査区中央西側北限、L16グリッドで観察した（図版６）

I　層：黒褐色土（10YR2/2）表土、植物根多い、層厚５～20cm。

II　層：褐色（10YR4/4）～暗褐色土（10YR3/4）同層上面から弥生土器が、中位から縄文土器が出土する、層厚10～30cm。

II′　層：暗褐色土（10YR3/3）同層を観察できない箇所もある。

III　層：黒褐色土（10YR2/2）同層下面で遺構を確認できる、遺物はほぼ中位まで掘り下げると出土しなくなる、層厚10～30cm、しまりややある。同層は標高がおよそ49.5ｍを越える区域（東側の舌状台地平坦面、ＳＮ07周辺）では観察できず、II層の下位にIV層が堆積している。



第５図　遺跡基本土層図

IV　層：黄褐色粘土（10YR5/8）同層以下が地山、調査区南東側（SK08周辺）では明黄褐色（10YR6/6）を呈する。

V　層：灰黄（2.5YR7/2）～浅黄色粘土（2.5YR7/3）この地点では観察できない、調査区北東側に分布している。

VI　層：明黄褐色粘土（2.5YR6/6）砂質粘土層。

第２節　調査の方法

発掘調査は、調査区を４×４ｍ方眼に組むグリッド法によった。方眼の設定にあたっては、仙北土木事務所が工事計画路線内に打設した中心杭のうち№115杭を原点とし、これと№114杭を結んだ線を東西基軸線とし、これに直交する線を南北基軸線とした。４ｍ毎に交わる点には、南北方向に南からＧ・Ｈ・Ｉ・Ｊ・Ｋ・Ｌのアルファベットをあて、東西方向には西から10、11、12‥‥26、27、28の２桁の数字を用い、その組み合わせによって呼称される交点のうち南東隅にあたるものをグリッド名とした。原点（№115杭）は、Ｊ20となる。南北基軸線と真北のなす角度はＮ－9°－Ｅである。なお、グリッド杭打設は委託とし、調査開始前の５月17、18日の２日間で完了している。

検出した遺構は、その種別を問わず一連の番号を付してある。番号登録の後、遺構と断ずることができなくなったもの～倒木痕など～については、これを欠番としている。

遺物の取り上げにあたっては、現場で遺物１点もしくは１個体の平面位置（Ｘ・Ｙ座標）、垂直位置を台帳に記入しておき、整理作業時にパーソナルコンピュータを利用して「遺物出土地点図」を作成した。作成に使用したプログラムは、吉田真氏作製の「遺物管理プログラムver 1.0」である。(註１)

図面、写真などの記録方法については、秋田県埋蔵文化財センターで実施している方法に準拠している。

第３節　調査経過

５月21日、調査開始。以下は調査日誌からの抜粋である。発掘作業に従事してくださる方々へ調査手順などの説明の後、調査区内に自生している雑木・下草の伐採・刈り取りとその搬出作業を行う。22日、曇り時々雨、肌寒い一日。範囲確認調査時の廃土を除去し、午後からこれと並行して粗掘りを始める。調査区南側Ｋ・Ｌ13グリッド（以下、グリッド省略）にて縄文土器が顔を現す。表土から10cm足らずの深さでしかない。

24日、Ｈ20にて有孔円盤状土製品（半欠）が出土。周辺から弥生土器片が認められることから弥生の紡錘車かもしれない。25日、好天のなか本日よりベルトコンベアーを起動させ粗掘りを進める。28日、快晴。Ｊ20Ⅱ層上面にて弥生土器比較的まとまって出土した。

29日、晴。Ｊ15にて砥石３点検出、同一個体と思われる。30日、今日も暑い。調査区西端Ｊ11にて石匙が出土する。

６月１日、午後から雨となる。沢部は滑り易く、慎重に作業を進めなければならない。４日、

K13周辺の縄文土器、写真撮影の後取り上げる。この下に遺構はあるか？。

５日、曇りなれど暑い。H16の炭化物の集中箇所をＳＸ02と登録し、確認面での写真撮影を行う。同日、20ライン以西の粗掘り完了する。７日、Ｌ21・22で縄文晩期の土器を発見する。Ｌ23の凹みは、炭窯のようである。調査区外にも何箇所かの同様の凹みが存在する。現代の築窯ではないか。８日、風なく蒸し暑い。H21にて弥生土器まとまって出土する。

11日、20ライン以東では粗掘り、以西では遺構確認のための精査を実施している。炭窯（ＳＸ04）完掘する。12日、Ｊ２１西側II層下面で焼土面確認、周辺で弥生土器が検出されていることからも、該期の住居跡が眠っているのか。13日、昨夜の雷雨で現場に大分水が溜まっていた。15日、本日梅雨に入る。調査区全域の粗掘り完了する。H24で縄文らしき土器の集中する箇所あり、これを取り除きIII層下面を精査したところ黒色土のプランが現れた。一部は調査区外に及びそうである。ＳＫ08と登録する。19日、４時過ぎから小雨となる。ＳＫ08とこの前後に登録した円形プランの遺構はいずれも深そうである。遺物は見当たらない。

20日、調査区東端の沢部分トレンチ調査に入る。遺跡全景写真を西側より撮影する。Ｌ20の落ち込みは、当初倒木痕と考えていたが、精査の結果土坑であることが明らかとなった。ＳＫ11とする。21日、東側より遺跡の全景写真を撮影する。この後雨。雨中でＳＫ11完掘、遺物なし。地形測量に入る。

22日、晴。地形測量の終了を以て、本調査の現地での作業は滞りなく完了した。

註１　吉田真・小林克「遺物出土地点図作成作業へのパーソナル・コンピュータ使用」『よねしろ考古』第５号　1990（平成２年）　吉田真「遺物管理プログラムの作成」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第５号　1990（平成２年）

第４章　調 査 の 記 録

第１節　検出遺構と遺物

和田遺跡において検出した遺構は、弥生時代の焼土遺構１基、柱穴状ピット３基、現代（戦後と思われる）の炭窯１基、土坑１基、及び時期不明の土坑４基、フラスコ状土坑１基である。時期不明とは、遺構内出土遺物が認められなかったことによるものであり、後で述べるように遺構確認状況から縄文時代ないしは弥生時代に帰属すると考えている。

遺構の配置は、現代の土坑を除いて、調査区東側の小さな舌（台）状台地の狭い平坦面から東に緩傾斜する区域、標高では47.5～50ｍに集中している。

１　弥生時代の遺構

調査区中央東側Ｊ21グリッド周辺Ⅱ層（中～下位）は、和田遺跡で最も密度の高く弥生土器が分布している箇所である。出土した全遺物のおよそ1/4はＪ21グリッドから得られている。同所・同面を精査した結果、Ⅱ層下面から焼土遺構及び、柱穴状ピットを検出できた。遺構そのものからは遺物を確認できなかったが、周辺区域の同一レベルでの弥生土器出土の事実から、これらの遺構は該期に帰すと考えている。

ＳＮ07焼土遺構、柱穴状ピット（第７図、図版４）

Ｊ21・22、Ｉ21グリッドⅡ層下面で確認した。焼土面は径55cmの広がりをもっている。この遺構の東方で、径30cm前後の平面円形を呈する柱穴状ピットを３基確認している。深さは、Ｐ１で44cm、Ｐ２で35cm、Ｐ３で53cmとそれぞれしっかりした掘り込みである。

これらの遺構については、住居跡の炉（地床炉）・柱穴の可能性を想定できるが、その配置と明確な床面・壁などを一切確認できなかったことから、ここでは住居跡の可能性を残しつつも、焼土遺構及び柱穴状ピットとして報告している。

２　現代の遺構と周辺出土の遺物

本調査区を含めた周辺の台地斜面には現在でも径1～1.5ｍ、深さ数10cmの凹みが幾つか確認できる。調査区に係っている凹みを精査した結果、炭窯であることが判明した。付近の方々の話では、昭和30年代までこの地で製炭していたそうである。また周辺出土の遺物もこの年代を裏付けている。本項では、炭窯及び該期と考えられる遺構・遺物をまとめて報告する。

ＳＸ04炭窯（第８図、図版４）

調査区北東隅、Ｌ23グリッドで確認した。窯は、長軸現存で約２ｍ、短軸1.35ｍの規模であるが、東側の前庭の一部を後世の削平により失われている。窯本体、炭化室（焚口～煙出）は

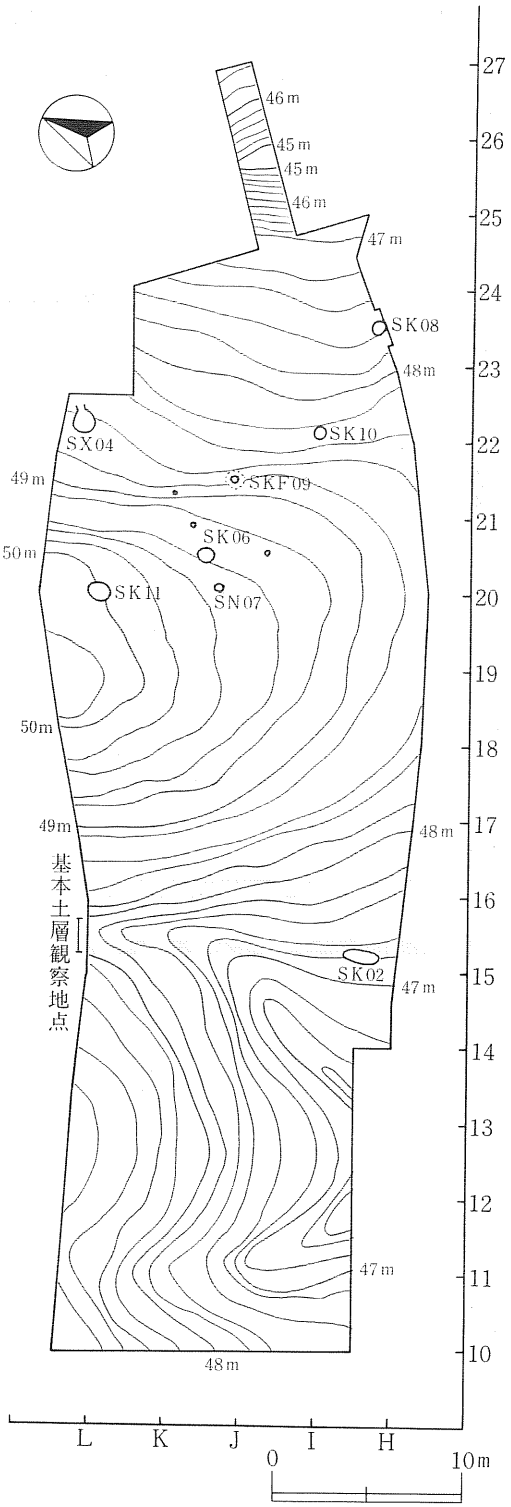
径約1.3m（約4.3尺）の円形を意図して築窯したようである。遺構確認面（地表面）から床面までの深さは最深で0.85mである。床面は、平坦で掘り方などは伴っていない。また焚口と煙出に相当する部分の床面にはレンガ状に切り出された軟質の凝灰岩が前者に２点、後者で４点置かれていた。それぞれ柱石、枕石と称されているものである。この窯は、形態・構造・規模から、簡略化された吉田窯（白炭窯）と呼ばれている類と考えられる。地元では日窯とも称している。

窯のすぐ南側、K23グリッドでナタ（第８図１）を１点表採している。刃部長23.5cm、茎には目釘が遺存している。このナタについて、築窯に従事したことのある方の話として、「使い古したナタは、あま石(凝灰岩)を切る時に用いる」のだそうである。事実出土したナタは、刃こぼれが顕著である。役目を終えたナタは、その場に放置されたかのようであるが、同時代の窯の調査例のある河辺町石坂台Ⅷ遺跡ではナタを築壁の中に埋め込んだような状態で出土していることもあり、意図的に埋納していた可能性も考慮にいれる必要がありそうである。

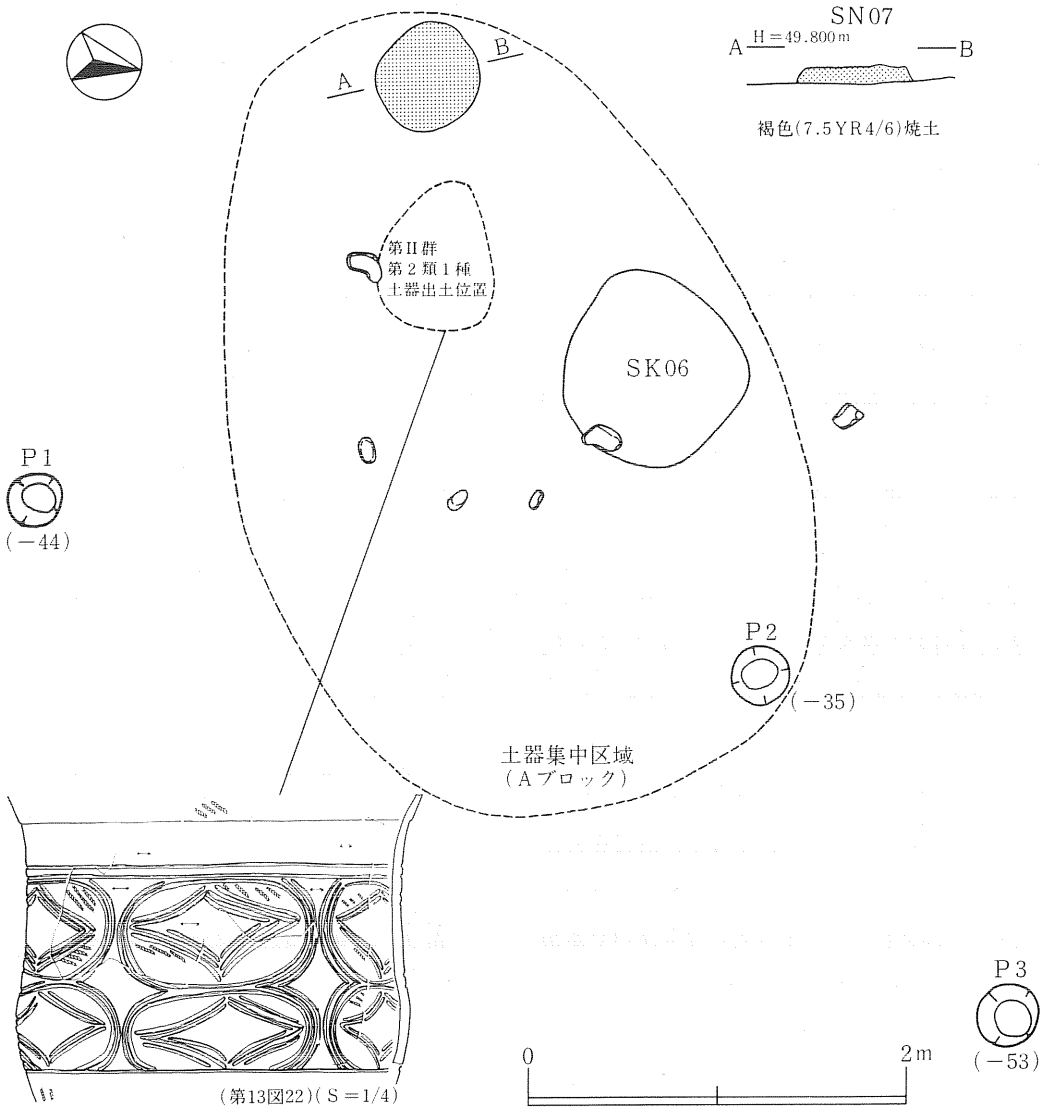
また窯の南東約６mのK24グリッドで、片手、片口の雪平鍋（２）が出土している。復元推定口径は18cmである。内面の独特の釉の発色（青白色）から楢岡焼と考えられる。

ＳＫ02土坑（第８図、図版４）

調査区中央西側、H16グリッドⅡ層上面で炭化物(材)の広がりとして確認した。本遺構は他の遺構が集中している緩斜面とは反対の



第６図　遺構配置及び地形図

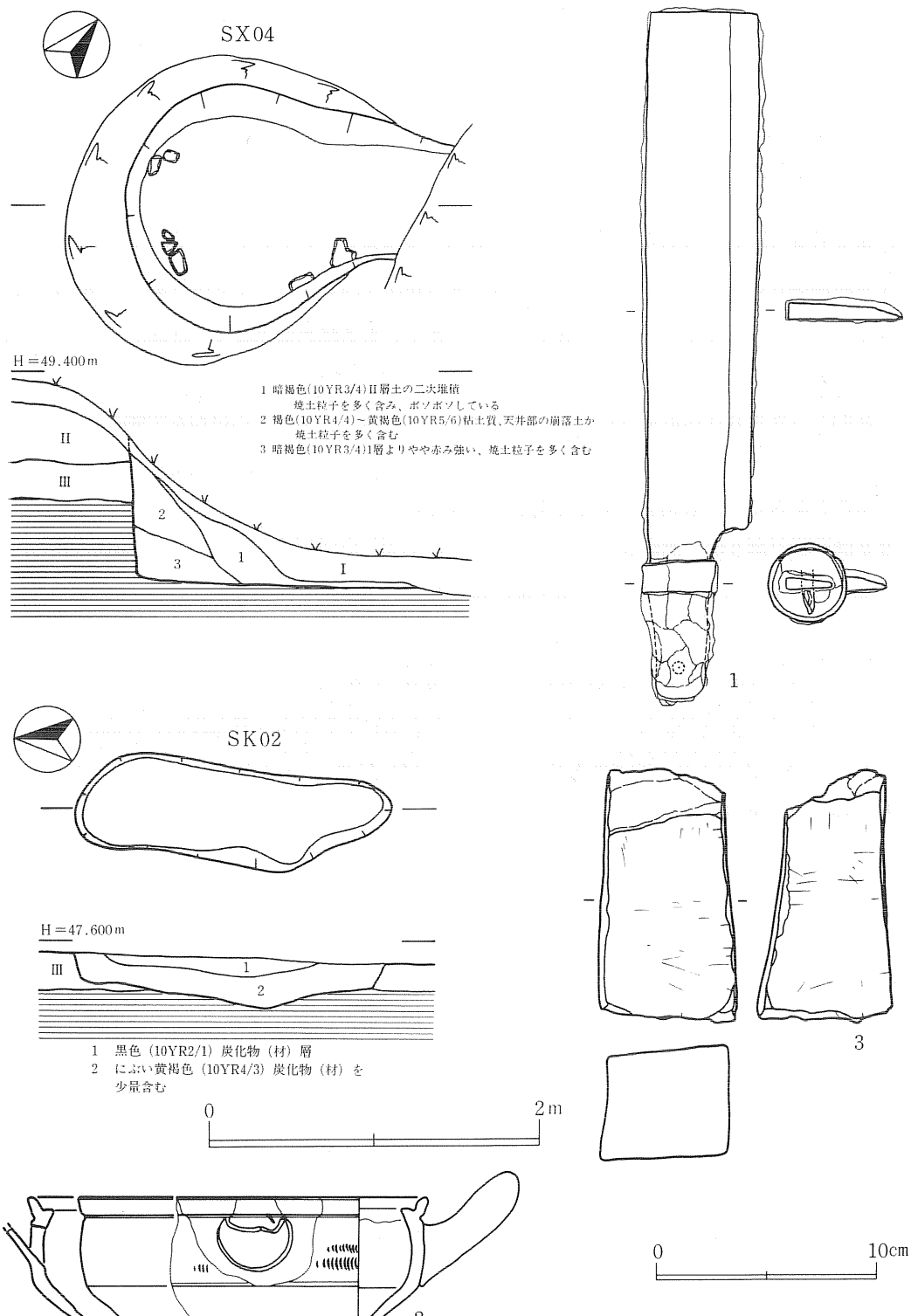


第７図　弥生時代の遺構と周辺出土の土器

西側斜面に単独で立地している。

Ⅱ層上面での炭化物（材）は、その遺存状態からごく新しい時期のものと想定し、炭窯と関連性の強い遺構と見ている。炭化物（材）の下部には、長さ1.9ｍ、幅0.6ｍの南北に長い長楕円形を呈する深さ30cmの掘り込みを確認できた。底面はほぼ地山（Ⅳ層）上面で収まっている。

本遺構の北西約10ｍのＪ15グリッドで、３片に割れた砥石（３）が出土している。上・下辺とも欠いているが、比較的大形で置砥石と見られる。４面とも使用されている。残存長11.4cm、幅6.3cm、厚5.2cm、重量587ｇ、石質は凝灰岩である。砥石はその性質上、形態的に古代から現



第８図　現代の遺構と周辺出土の遺物

代までほとんど変わることなく受け継がれていることから、その帰属年代が問題となるところであるが、ここでは古代の遺物も検出されていないことから、炭窯などと同時期に用いられた遺物と解釈し、ここに載せた。

３　時期不明の遺構－縄文～弥生時代－

本項で扱う遺構は、Ⅲ層下面あるいはⅣ層上面を遺構確認面とする土坑４基、フラスコ状土坑１基である。これらの遺構は調査区の東側、およそ20ライン以東に点在している。ここは、弥生土器及び縄文土器が広く分布している範囲と重複する。しかしながら各々の遺構内からは１点の遺物も出土しなかった。このことは、周辺出土の遺物出土レベル（Ⅱ層）と遺構確認面（Ⅲ～Ⅳ層）との差から生じた結果であり、少なくとも遺構の廃棄時期は遺物に与えられる年代より前であると言えるであろう。後述のように土器の概略的な位置付けとして、縄文時代中～晩期から弥生時代後期を中心とすることから、最も新しい弥生時代後期を下限とすることができる。一方上限時期については、明確な根拠を持たないが、形態的に縄文時代の土坑に類似することから、一応該期を上限と想定しておきたい。

ＳＫ06土坑（第９図、図版５）

調査区中央東側Ｊ21グリッドⅣ層上面で確認した。この位置は弥生土器の密集している箇所であり、これらの土器を取り上げた後の精査で暗褐色土のプランを検出した。弥生時代の焼土遺構ＳＮ04とは僅か２ｍの近接距離にある。確認面での標高は約49.5ｍである。

確認面の径は95cmで不整円形を呈している。深さは最深で125cm、構築方法に特徴がある。まずおよそ65～70°の角度で60cm程掘り下げる。ここに段を設け、ここから径50cm前後の円筒状に掘り込んでいる。

堆積土は５層に分けられる。土のしまり具合は、下位ほど弱くなっていく傾向にある。１層は、そのあり方から人為的埋土と考えられる。

ＳＫ08土坑（第９図、図版５）

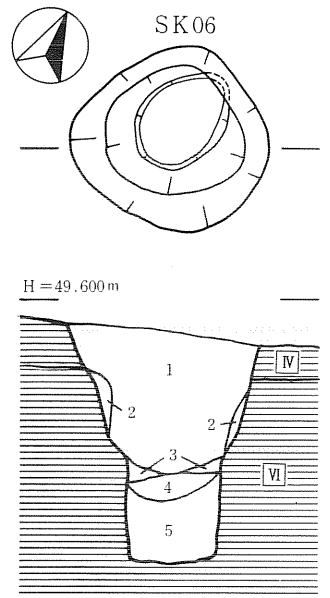
調査区南東隅、Ｈ24グリッドⅢ層下面で確認した。遺構の一部は調査区外に及ぶ。確認面での標高は約47.7ｍである。

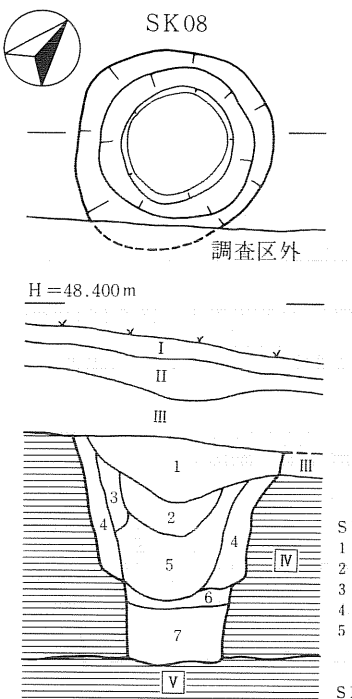
開口部径105cmで円筒状に120cm掘り込まれている。掘り込みはＳＫ06同様２段構えとなっている。中端の径は60cmである。

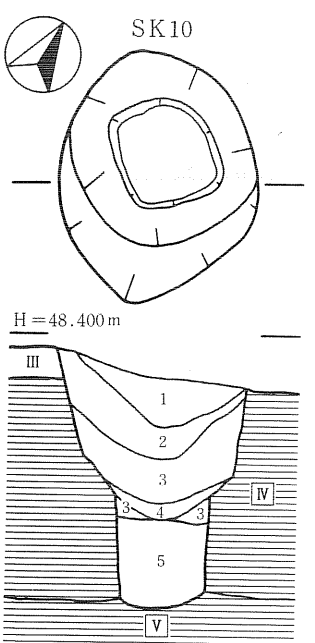
堆積土は７層に分けられる。最下層（７層）は、地山土と黒褐色土の混合土であり、上層よりしまりに欠ける。

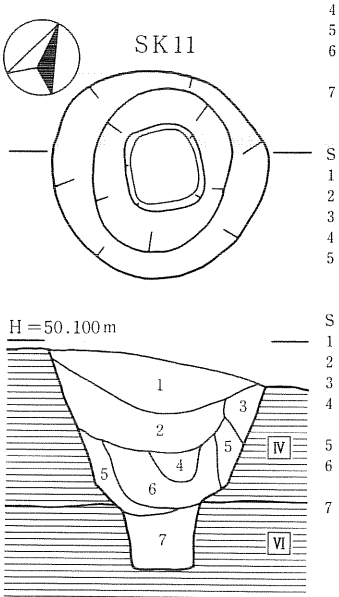
ＳＫ10土坑（第９図、図版５）

調査区東側、Ｈ・Ｉ23グリッドⅢ層下面で確認した。本土坑の東約６ｍには、ＳＫ08が位置している。確認面での標高は約48.3ｍである。









ＳＫ０６
1　暗褐色(10YR3/4)しまりあり、人為的埋土か
2　褐色（10YR4/4）
3　褐色（10YR4/4）しまりは２層よりやや弱
4　黄褐色(10YR5/6)地山(Ⅳ層)の二次堆積土
5　黄褐色（10YR5/6）～褐色（10YR4/6）しまりやや弱　地山（Ⅳ層）と１層の混合土か

ＳＫ０８
1　黒色（10YR2/1）しまりやや弱
2　暗褐色（10YR3/3）しまりⅠ層より強
3　暗褐色（10YR3/4）地山粒子やや多く含む
4　褐色（10YR4/4～4/6）壁の崩落土か
5　黒褐色（10YR3/1）しまりやや弱
6　明黄褐色（10YR6/6）地山（Ⅳ層）の二次堆積土
7　にぶい黄褐色（10YR4/3）５・６層の混合土しまりは１～６層より弱

ＳＫ１０
1　黒褐色（10YR2/2）しまりやや弱
2　暗褐色（10YR3/4）Ⅱ層土に酷似する
3　黒褐色（10YR2/3）
4　黄褐色(10YR5/6)地山(Ⅳ層)の二次堆積土
5　黄褐色（10YR5/6）～褐色（10YR4/6）しまりやや弱　地山(Ⅳ層)と１・３層の混合土か

ＳＫ１１
1　暗褐色(10YR3/4)下位に炭化物やや多く含む
2　褐色（10YR4/6）しまりあり、粘土質
3　黄褐色（10YR5/8）壁の崩落土か
4　暗褐色（10YR3/3）地山（Ⅳ層）粒子を多く含む
5　黄褐色（10YR5/8）３層と同質か
6　黒褐色（10YR2/3）しまり弱、炭化物を比較的多く含む
7　褐色（10YR4/4）しまり６層より弱　地山（Ⅳ層）と暗褐色土の混合土か

0　2m

第９図　時期不明(縄文～弥生)の土坑

開口部径は110cmで、不整円形を呈している。深さは135cm、ＳＫ08同様２段構えの掘り込みとなっている。段を有する部分の平面形は一辺55cm前後の隅丸方形を示している。

堆積土は５層に分けられる。最下層（５層）の土質、しまり具合はＳＫ06・08に共通するものがある。１～４層は自然堆積のようである。

ＳＫ11（第９図、図版５）

調査区中央東側、K21・22グリッドⅣ層上面で確認した。本土坑の南東約６ｍには、ＳＫ06が位置している。確認面での標高は約50ｍである。

開口部径は110～115cmで略円形を呈する。深さは115cm、ＳＫ06・08・10同様２段構えの掘り込み形態をもつ。中端の平面形は一辺40～45cmの隅丸方形となる。

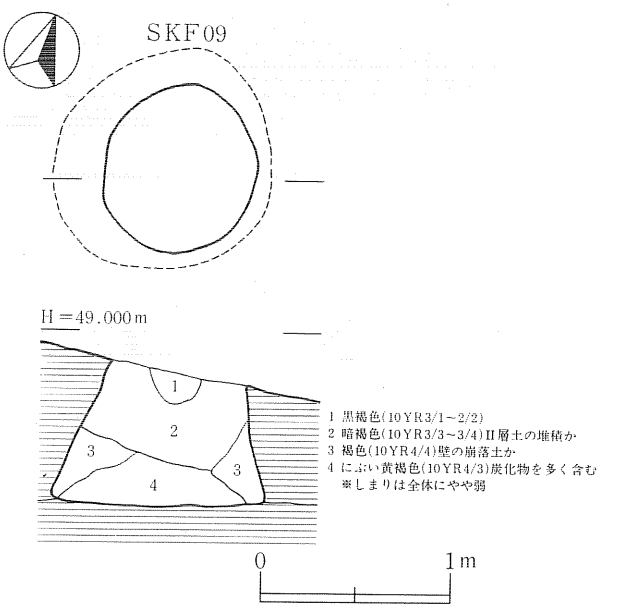
堆積土は７層に分けられる。最下層（７層）のあり方は、上記３土坑と共通する。

ＳＫＦ09フラスコ状土坑（第10図、図版６）

調査区中央東側Ｊ22グリッドⅣ層上面で確認した。ＳＫ06は、本遺構の西約4ｍにはＳＫ06が、南東約５ｍにはＳＫ10がそれぞれ位置している。確認面での標高は約48.9ｍである。

開口部の径は80～90cmで、略円形を呈している。底径は115cm、深さは75cmを測り、奇麗な円錐状に掘り込まれている。

堆積土は４層に分けられる。４層には細粒化した炭化物が比較的多く含まれている。

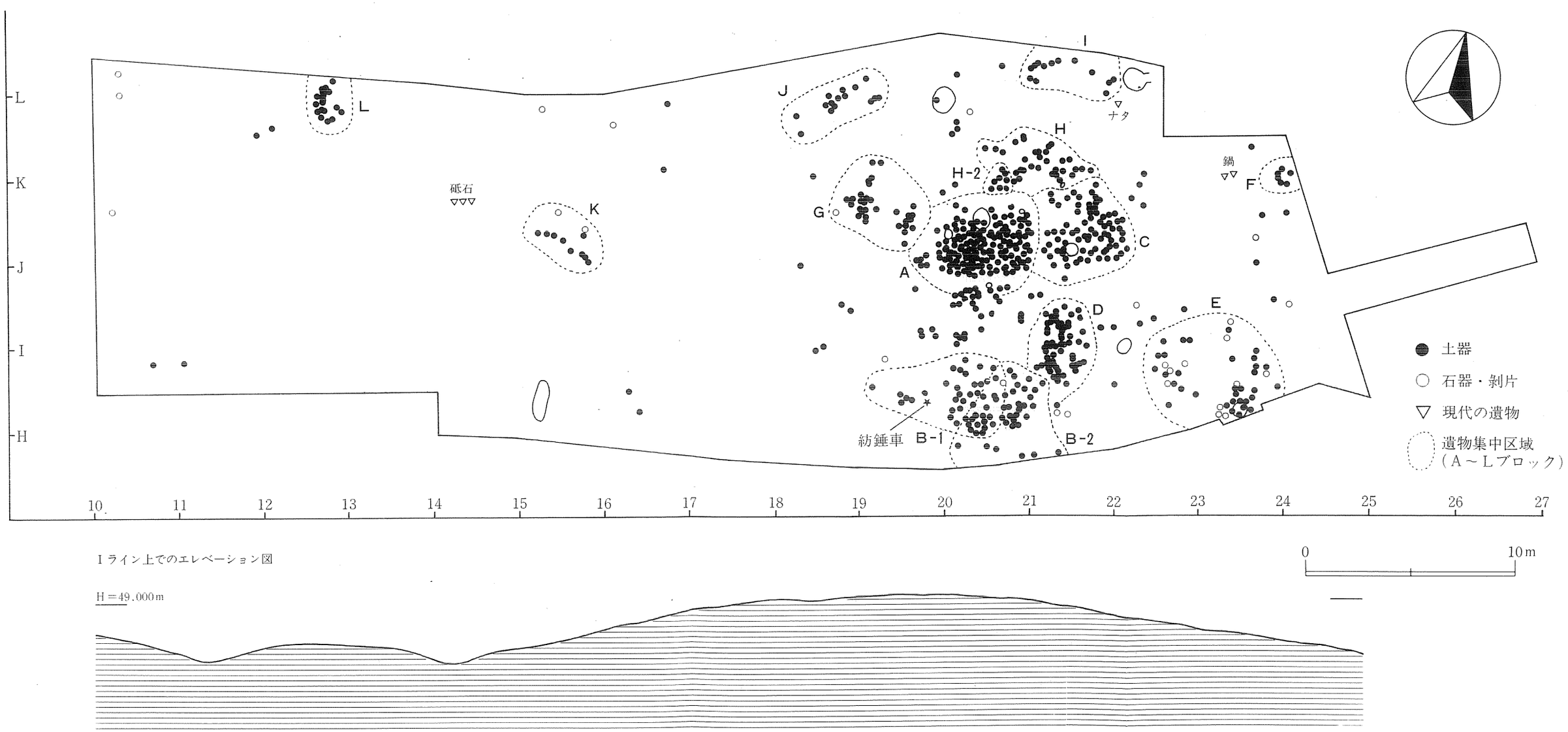


第10図　時期不明（縄文～弥生）のフラスコ状土坑

第２節　出土遺物

本調査で得られた遺物は、前節で報告した現代の遺物を除いて総数600点余りである。この中には、弥生土器を中心として、縄文土器、紡錘車と考えられる土製品、石器、剥片が含まれている。また、高師小僧と称されている管状の自然遺物も100点程確認した。

遺物の分布は、調査区中央から東側の狭い舌（台）状台地平坦面から東に緩く下る斜面に集中する傾向にある。19ライン以東で全遺物の約90％が出土している。



第11図　遺物出土地点図

１　土器

土器の分布は、Ｊ21グリッドを中心とする径10数ｍの範囲内に集中している。これを微視的に見ると、径４ｍ位の小さなブロックの集合体のようにも看過できる。今後の説明をし易くするために、このブロックに名前を付けておこう。最も密な分布を示しているＪ21グリッド周辺をＡブロック、次いでH21グリッド周辺をＢブロック、Ｊ22グリッド周辺をＣブロック、Ｈ・Ｉ22グリッド周辺をＤブロック、ここまでが比較的まとまりをもっている。その他の小ブロックについては第11図を参照していただきたい。

個々の土器については、破片資料のみであり、全体の器形の知れるものはない。

以下、縄文土器を第Ｉ群土器、弥生土器を第II群土器として、それぞれを細別して報告する。

（１）第Ｉ群土器（第12図、図版７）

出土した土器のうち、縄文土器の占める割合は極めて低い。分布が認められるのは、Ｈ・Ｉ・Ｊ・Ｌブロックであり、調査区の北側に偏している。文様構成から２細分できる。

第１類（第12図４～７）

沈線、刻目などで文様が構成される類。Ｊ・Ｉブロックで出土している。

Ｊブロック出土の４は、深鉢形土器の胴部資料である。摩滅が著しいが、ＬＲ縄文のち沈線、磨消しを行っている。

Ｉブロック出土の５、６は平縁の浅鉢形土器で、口縁部に連続刺突文を巡らし、その下には、いわゆる雲形文を配している。７は口唇部に刻目をもつ小型の鉢形土器であろう。口縁～頸部には少なくとも４条の沈線が引かれている。３点とも胎土に細砂粒を比較的多く含んでいるが、焼成良好である。色調はにぶい黄褐色を呈している。

第２類（第12図８～15）

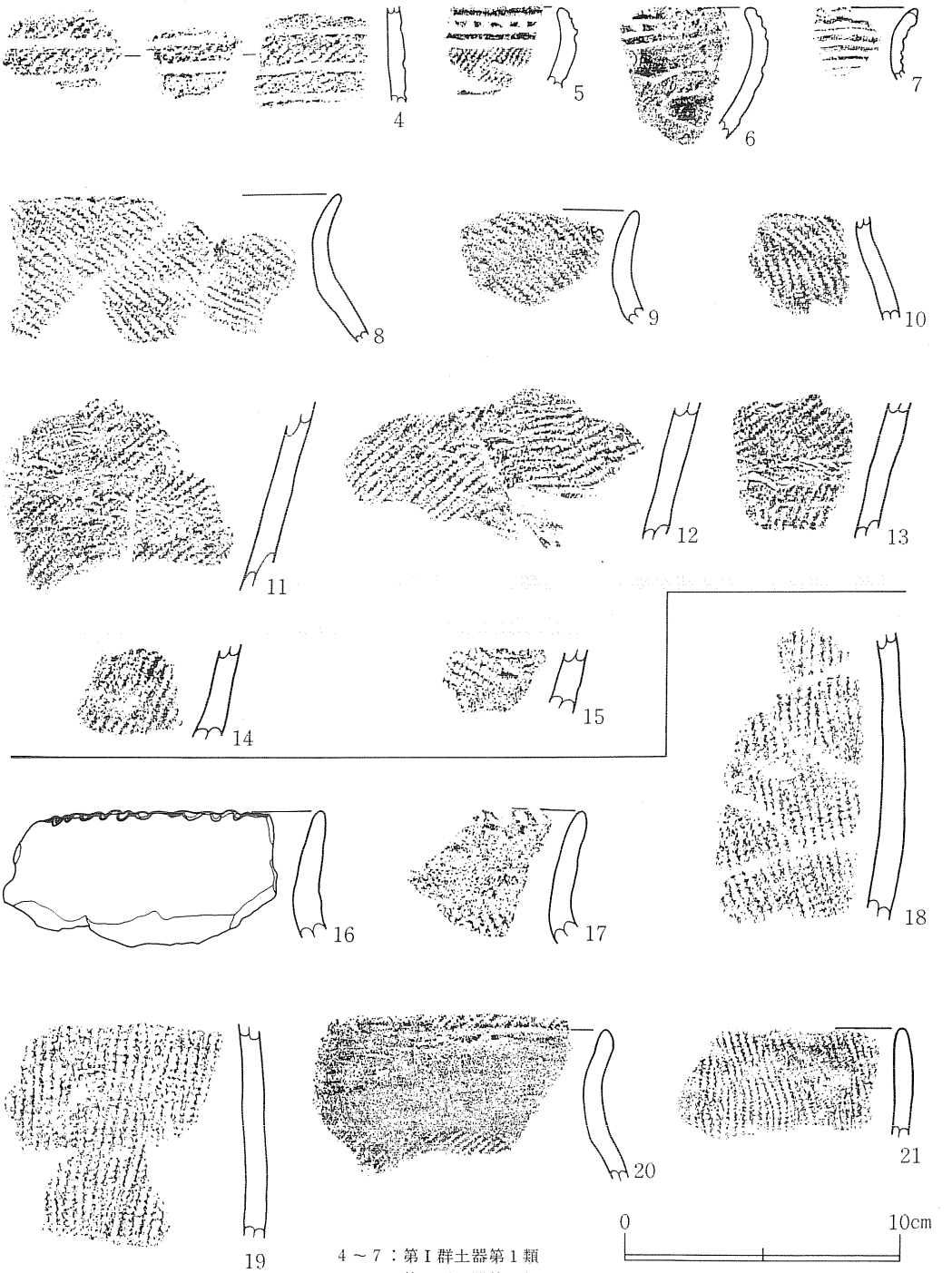
縄文のみで文様が構成される類。Ｈブロック西端の一角（Ｈ－２）、Ｌ・Ｉブロックで認められる。いずれも、深鉢形土器の口縁部～胴部上半部（８～10）ないしは胴部下半部（11～15）の資料である。11～14は同一個体と思われる。縄文原体は11～14がＬＲ、8～10、15がＲＬ、11～13は開端の結節付の縄を回転施文している。色調は11～14で赤褐色、他は浅黄橙色を呈する。

（２）第II群土器（第12～15図、図版８～10）

本遺跡の主体を占める土器である。Ｌブロック以外で出土している。胎土、器厚、文様から大きく２分できる。

第１類（第12図16～21）

胎土に砂粒を比較的多く含み、器面がやや厚く、主として縄文のみで構成される土器群である。Ｂ－２ブロックで２個体（16～19、21）、Ｈブロック（Ｈ－２の北側）で１点（20）確認している。



４～７：第Ⅰ群土器第１類
８～15：第Ⅰ群土器第２類
16～21：第Ⅱ群土器第１類

第12図　出土遺物（１）　土器（１）

16～20は比較的大型の深鉢形土器である。口縁～頸部はナデ等により無文化し、胴部以下にＲＬ縄文を施している。口唇部には刻目が加えられる。21は平縁の鉢形土器である。16～19は同一個体であり、色調は明褐色を呈し、胎土に金雲母を含む砂粒を多量に混入している点に一つの特徴がある。

第２類（第13図22～第15図）

胎土は比較的精選され、器面が一般に薄く、沈線、斜行あるいは縦走する縄文（附加条縄文が多い）、撚糸文で構成される土器群である。主に口縁部の形態、文様の有無及び施文部位などで細分する。

第１種－胴部に沈線を主体とする文様帯をもつ深鉢形土器である。Ａブロックから１個体出土している。22は口縁端部を欠くが、この部分が緩く外傾する。やや肥厚した口縁部には縄文帯が形成される。胴部は、無文の頸部とを画する２本の平行沈線の下に、２ないし３本の沈線で楕円形文を上下２段に５ないし６単位割り付け、その中にこれも２あるいは３本の弧線を菱形の構図で描く。菱形内部と隣あった楕円形との間は磨消を行う。地文は附加条縄文と思われる。器外面の一部に煤状炭化物が付着している。なお、22と同じ構図を採ると見られる破片が１点Ｄブロックから出土している（23）。

第２種－口縁部に２ないし３本の沈線を弧状に配す土器で、器形は平縁の鉢形土器であろう。Ａブロックから１点出土している（24）。地文にＲＬ縄文を用いている。

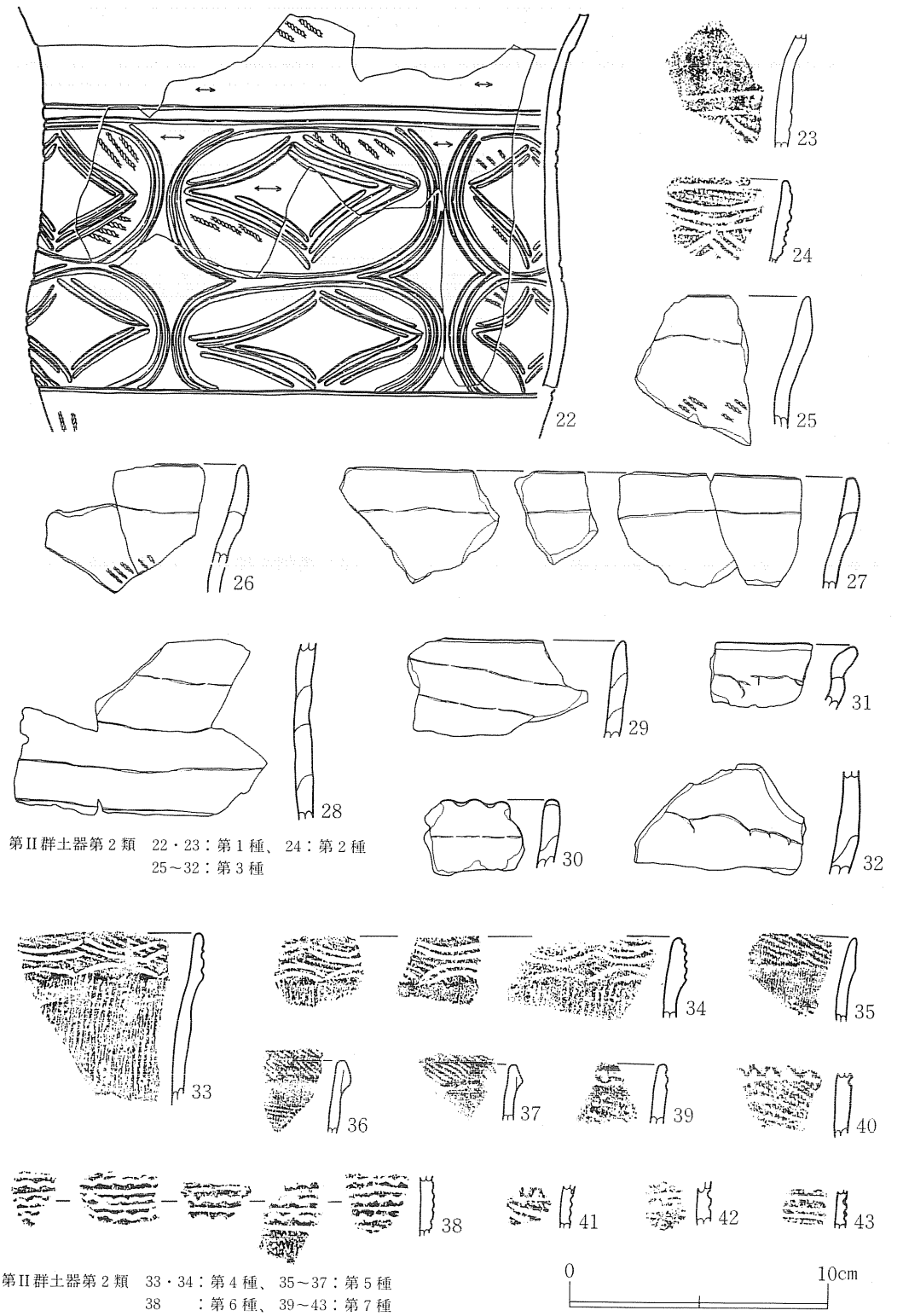
第３種－口縁部が幾分肥厚する深鉢形土器である（25～28）。口縁～頸部は無文となり、胴部に附加条縄文が施される（25、26）。Ａブロックから出土している。1.5cm前後の幅で粘土紐の積み上げ痕跡が外面に明瞭に残る。28は胴部資料であるが縄文が認められないことから、本種には、胴部に縄文を有する例と無文の例が存在する。器外面に比較的厚く煤状炭化物が付着している。

また無文の口縁部資料では、肥厚せずに直立するタイプ（29、30）、短く「く」の字に外反するタイプ（31）も少例存在する。32は31と同一個体であり、口唇部に指頭様圧痕が認められる。

第４種－口縁部が折り返し状に肥厚し、ここに連弧文を配している鉢形土器である。Ｃ・Ｈブロックからそれぞれ１個体ずつ出土している。

33の口縁部は、斜行する附加条縄文（あるいは撚糸文）の上に２本一組の上向の連弧文と１本の下向きの連弧文を組み合わせている。口唇部には撚糸の圧痕が観察できる。胴部は縦位のＬ撚糸文である。34も基本的に33と同じモチーフとなっているが、上・下向きの連弧文はいずれも２本一組である。

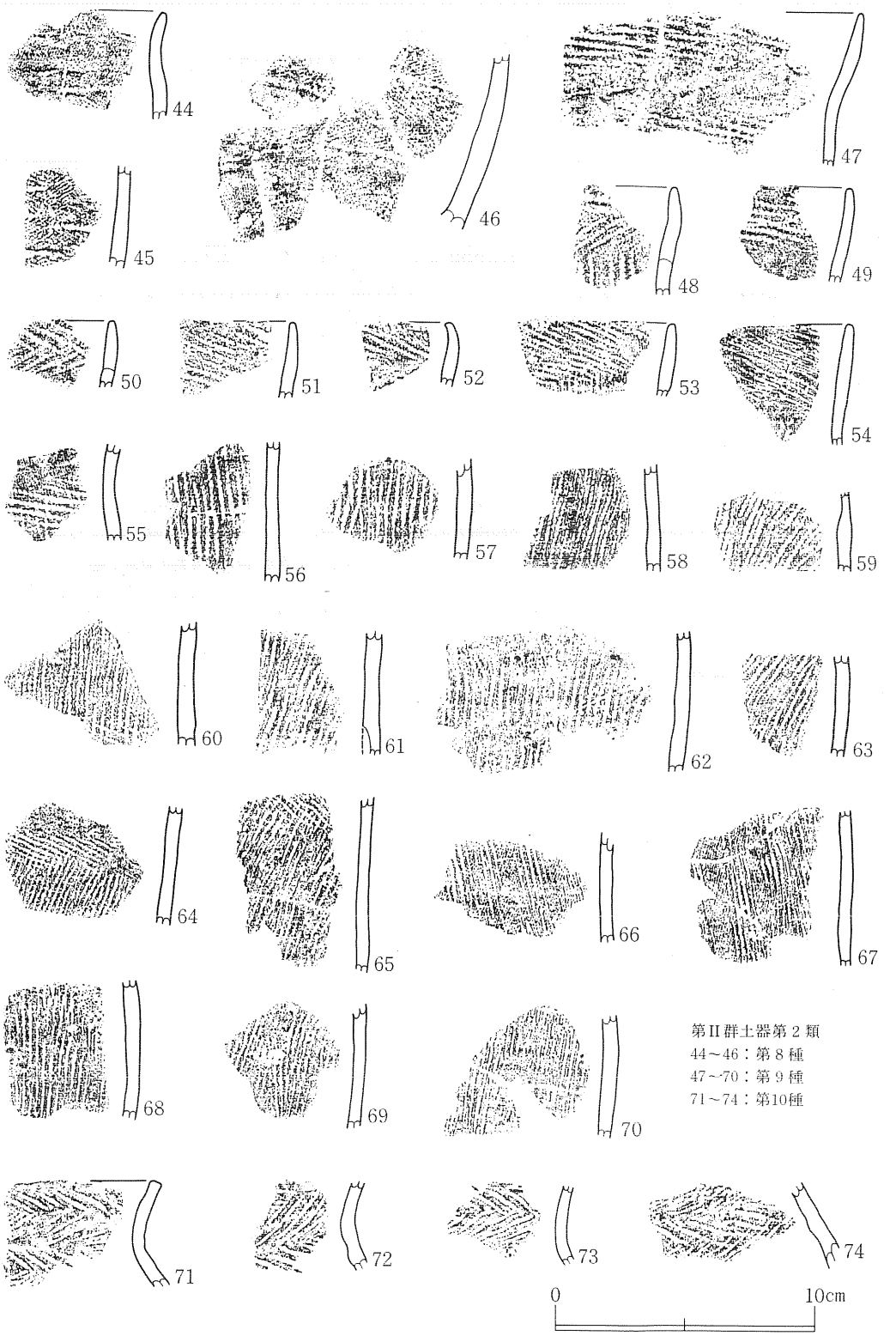
第５種－口縁部が折り返し状に肥厚し、ここに斜行する縄文帯をもつ土器である。Ｇブロックから２点（36、37、同一個体か）、Ｂ－１ブロックで１点（35）出土している。第４種より口縁部文様帯の幅が狭く36、37は１cm未満となる。胴部は斜行ないしは横走する縄文である。縄文は口



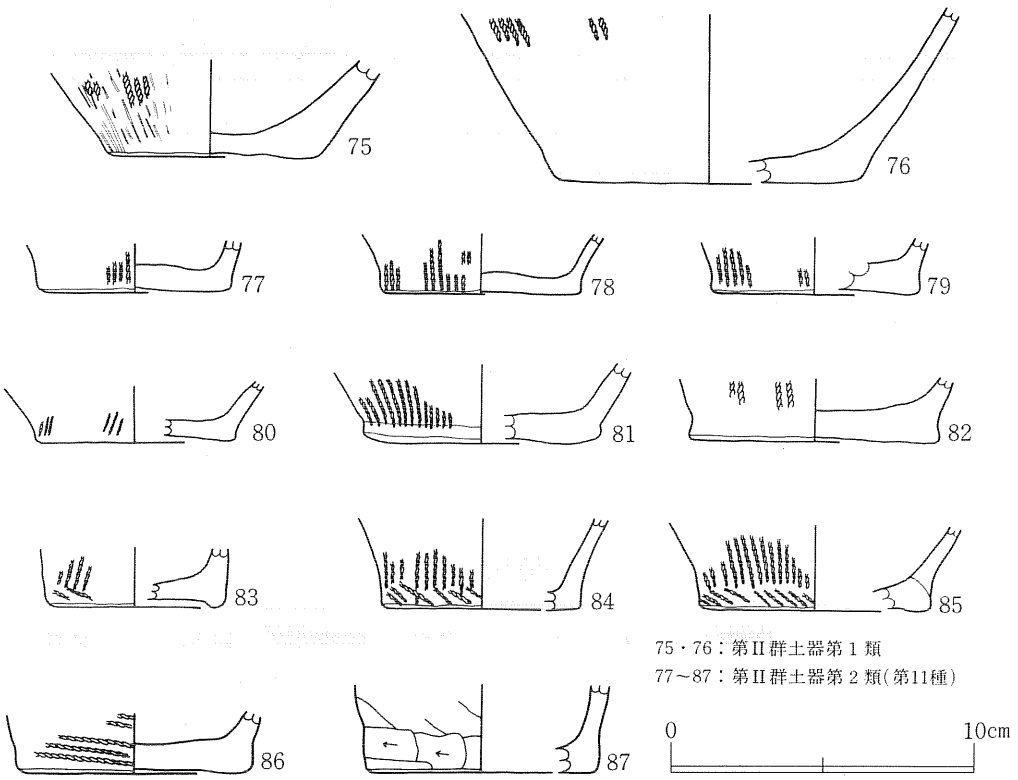
第Ⅱ群土器第２類　22・23：第１種、24：第２種
25～32：第３種

第Ⅱ群土器第２類　33・34：第４種、35～37：第５種
38　　：第６種、39～43：第７種

第13図　出土遺物（２）　土器（２）



第14図　出土遺物（３）　土器（３）



第15図　出土遺物(４)　土器(４)

唇部にも認められる。胎土に微量の金雲母を含む。

第６種－器種、施文部位は明らかではないが、少なくとも４条以上の平行沈線の間に細かい波状沈線を加えている(38)。Ａブロックから出土している。器外面に煤状炭化物が付着している。

第７種－いわゆる交互刺突を有する土器である。39は口縁部に施文しているが、その他は小破片のため施文部位は明らかではない。Ｃブロックで４点（39～42)、Ｄブロックで１点（43）出土している。

第８種－頸部から口縁にかけて緩く外反する小型の鉢形土器である。遺物の集中する区域から離れたＫブロックから１個体出土している（44～46)。口縁部は無文化され、口唇部は面取りがなされている。胴部は細い縄を回転方向を変え羽状に施文しているようであるが、摩滅のため判然としない。二次的に火熱を受け、器面の一部が剥落している。

第９種－口縁部は斜行あるいは羽状に、胴部には縦走する縄文（附加条縄文）あるいは撚糸文を配している（深）鉢形土器である（47～70)。口縁部が幾分肥厚する例（47、48）とそうでないもの(49～54)の別があるが、一般に口縁は内傾する。Ａ・Ｃブロックに多く、Ｆブロックにも含まれる。47～52、 55～62は附加条縄文、 その他はＬ撚糸文であろう。羽状に施文されてい

る48、50は２種の原体を用いている。胴部資料を含めた個体数では本種が他を圧倒する。

第10種－壺形を呈すると考えられる土器に附加条縄文を羽状に回転施文したものである。Ｂ－２ブロックから１個体出土している(71～74)。口唇部には刺突もしくは刻目が加えられているようであるが、判然としない。原体は軸となる２段の縄を２種(ＬＲとＲＬ)を用意し、これに１段の縄(ＬとＲ)をそれぞれ軸縄の撚と同方向に絡げているようである。軸縄の圧痕も一部で観察できる(挿図の矢印部分)。今まで述べてきた附加条縄文もこれと同種の原体を用いていると見られる。

第11種－底部資料を一括する(75～87)。Ａ・Ｃブロックから多く得られている。底面は一般に丁寧にナデられている。大部分の資料は平底あるいは揚底気味であるが、Ｈブロック出土の１点(83)は揚底を意図して作られている。胴部下端の文様は、縦走する条間隔の開いた附加条縄文もしくは撚糸文が主体を占めることから、第９種土器に伴う底部の可能性が高い。また横走する縄文(86)、横位のケズリ(87)も認められる。75の器外面は、縄文との先後関係は不明であるが縦位のヘラ状工具によるナデ(擦痕)が認められる。なお、5、76は胎土から第１類土器の底部と考えられる。

２　土製品（第16図88、図版８、９）

遺物集中区域の南西隅、H20グリッドII層上面(Ｂ－１ブロック)で有孔円盤状土製品を確認した。弥生時代のこの種の形態を示す遺物は、一般に紡錘車と称されている。

全体の2／3は欠落しているが、推定径7.5cm、孔径0.9cm、最大厚1.2cmを計測する。現存する部分の重量(21.83ｇ)から推定される完形重量は約71.5ｇとなる。文様は表面のみで、裏面は丁寧にナデられ、平坦となっている。従って断面形態は、いわゆる紡錘形ではなく扁平な半円状を呈している。

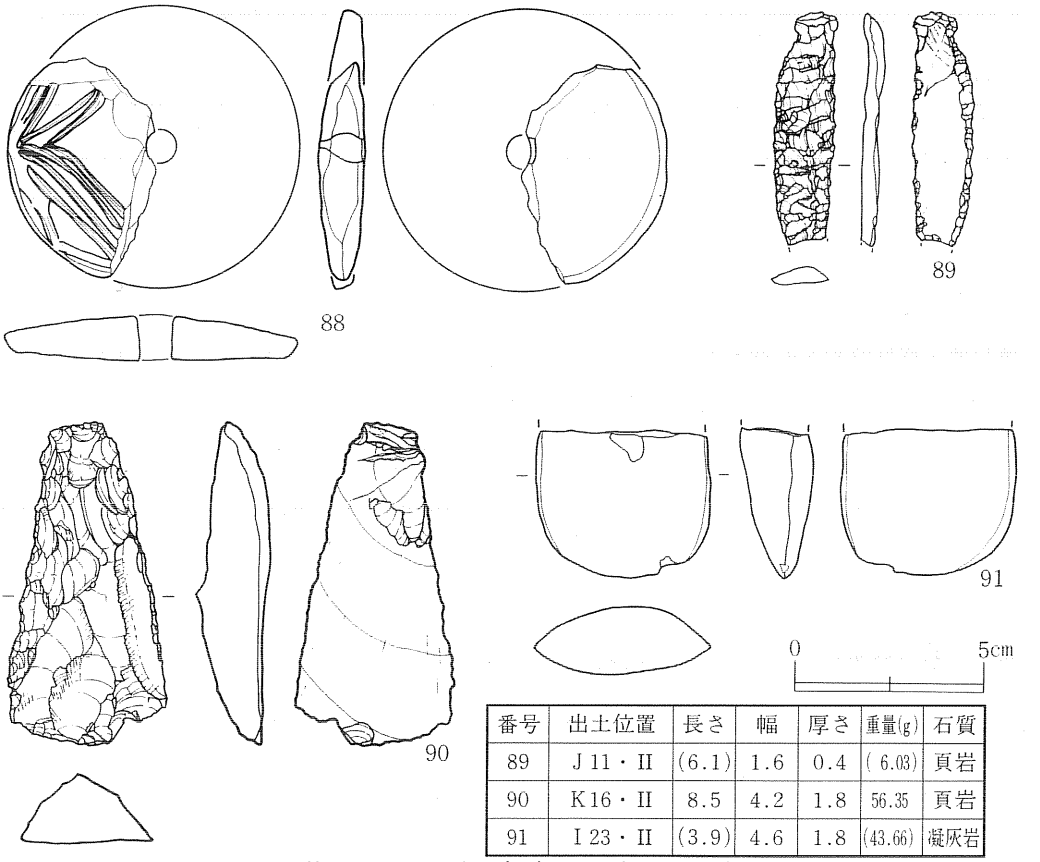
またこの断面(割口)観察から円盤の製作工程が復元できる。即ち、まず径約４cm、厚さ0.8cmの小さな円盤を作る。これに両面から薄い粘土板を包み込むようにして貼り合わせる。最後に中央に孔を穿つことによって、紡錘車の祖形が完成となる。

胎土には、金雲母、石英、赤色粒子などの細砂粒を比較的多く含んでいる。色調は、にぶい黄褐色を示している。この胎土は、第II群第１類土器（第12図16～19）の胎土に似る。

表面の文様は、沈線のみで構成されている。円盤の外周を１本ないし２本の短沈線で多角形様に縁どる。これに囲まれた内側には、おそらく方形ないしは菱形を意図した構図を２本一組で描いているようである。側面は、裏面同様のナデである。

３　石器（第16～18図、図版９）

和田遺跡で出土している石器、剥片は、総数でも30点足らずである。全遺物の内の５％にも満たないことになる。しかも第11図でも明らかのように、土器の集中している範囲と石器、剥



番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量(g)	石質
89	J 11・II	(6.1)	1.6	0.4	(6.03)	頁岩
90	K16・II	8.5	4.2	1.8	56.35	頁岩
91	I 23・II	(3.9)	4.6	1.8	(43.66)	凝灰岩

第16図　出土遺物(５)　土製品、石器(１)

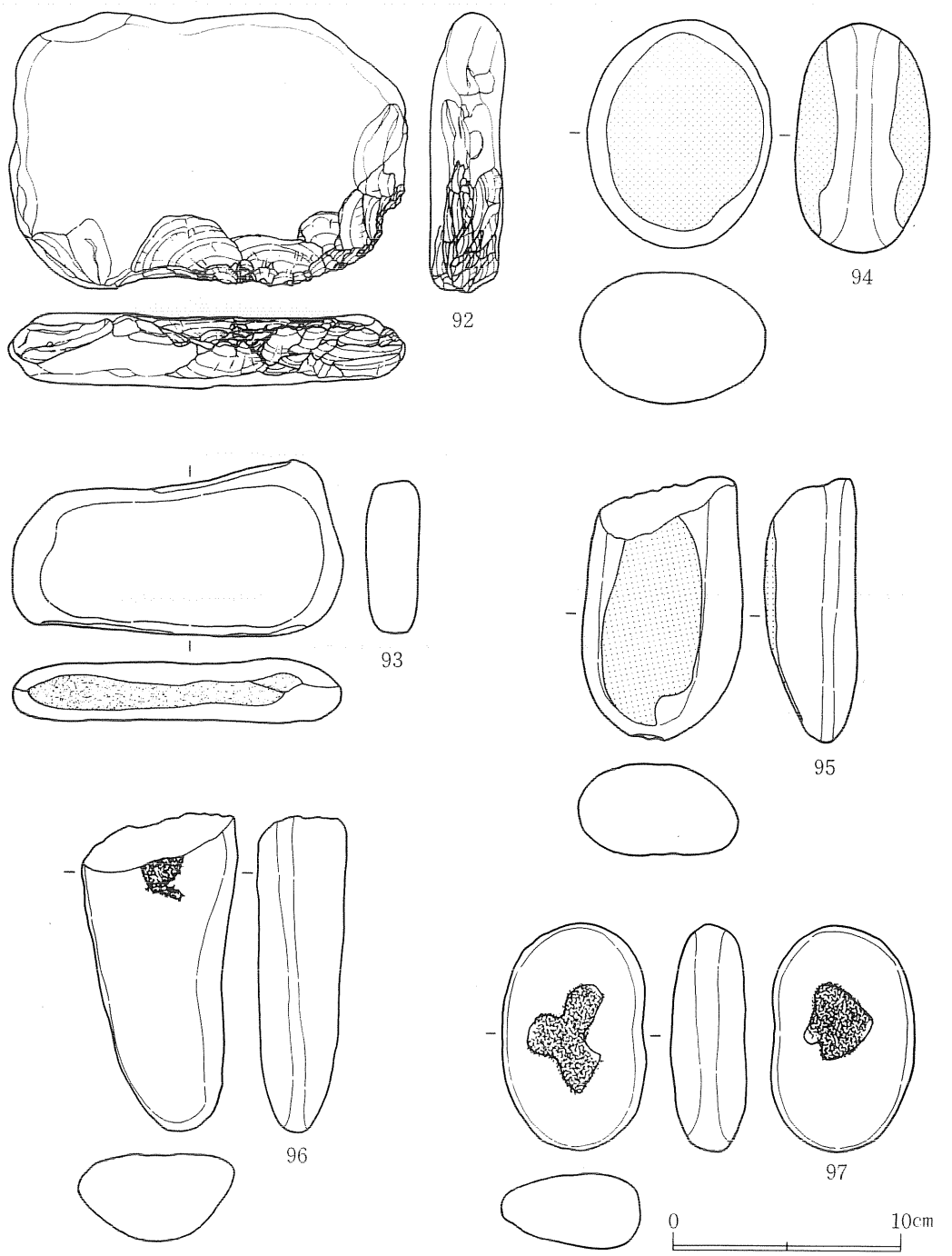
片の分布地点は基本的に排他的な位置関係を保っているようにも読み取ることができそうである。また土器の最も集中しているＡブロックでは１片の石器、剥片が出土しなかった点を特徴として挙げることができる。ここで報告する石器は、石匙、箆状石器、磨製石斧、礫器、擦石、磨石、凹石、台石である。

第16図89は縦長の剥片を用いた石匙である。調査区最西端Ｊ11グリッドII層から単独で出土した。先端部を欠いている。90は撥形を呈する片面調整の箆状石器である。K16グリッドからこれも単独で出土している。91は佐原真氏分類で言う弱凸強凸片刃の磨製石斧である。調査区東側Ｉ23グリッドII層出土である。刃部の形状は円刃である。

第17図92は、扁平な石材の下辺を両面から粗く調整し、刃部を作出している礫器である。協和町上ノ山II遺跡における半円状扁平打製石器Ｉ類に該当する。93も扁平な石材の下辺を擦っている擦石である。この部分以外には手を加えていない。

94、95は石材の面をすっている磨石である。94は両面、95は片方に磨面を有している。

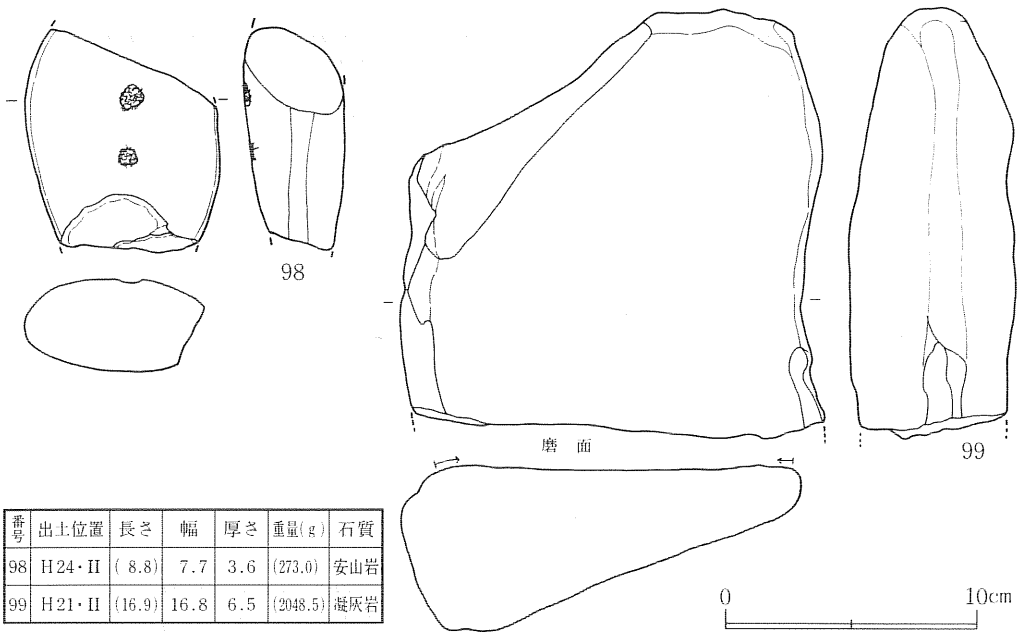
96、97、第18図98は凹石である。96、98は片面、97は両面に敲打による凹面をもつ。いずれ



番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量(g)	石質
92	表　採	17.3	12.0	3.1	935.6	頁岩
93	L11・II	14.4	7.5	2.8	455.9	砂質凝灰岩
94	H22・II	9.9	8.0	5.8	653.6	凝灰岩

番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量(g)	石質
95	J19・II	(11.5)	6.9	4.0	(375.8)	凝灰岩
96	H22・II	(13.8)	6.8	3.7	(421.6)	緑色凝灰岩
97	表　採	9.9	6.2	3.2	299.0	花崗岩

第17図　出土遺物(６)　石器(２)



番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量(g)	石質
98	H24・II	(8.8)	7.7	3.6	(273.0)	安山岩
99	H21・II	(16.9)	16.8	6.5	(2048.5)	凝灰岩

第18図　出土遺物（７）　石器（３）

の凹部もその輪郭が明瞭でなく、分散的な敲打作用の結果と考えられる。

99は、その一部に火熱の痕跡を残している台石である。片面（図示面）に磨面を有する。欠損のため全体の形状は不明である。

問題となるのは、石器の帰属時期である。遺物を層的には分離できない。土器で言えば、分布の区域が縄文と弥生では明瞭に分けられる。この区分けをそのまま石器・剥片に当てはめると次のようになる。縄文土器分布域に含まれる石器・剥片は認められない。また弥生土器の分布域から外れ単独で出土している石匙（89)、箆状石器（90)、擦石（93)、及び表採の礫器（92)、凹石（97）は帰属不明となる。残りを弥生の石器と仮定すれば、Ｅブロックでフレークを中心にややまとまりが認められるものの、その他では、各ブロックの外縁に沿って点在しており、石器組成は、磨製石斧と磨石、凹石、台石の礫石器に限られる。

第5章　ま　と　め

和田遺跡の発掘調査で得られた資料は、遺構として、弥生時代の焼土遺構1基、柱穴状ピット3基、時期不明であるが縄文ないし弥生時代と想定できる土坑4基、フラスコ状土坑1基、及び現代の炭窯1基、この時期に帰すであろう土坑1基が検出されている。また遺物は、弥生時代の土器、土製品を中心に縄文時代の土器、石器が出土している。中でも半欠しているが土製紡錘車の出土はその発見例の稀有さから特筆できる。

本章では和田遺跡において特徴的と考えられる資料を抽出して、その類例などから検証し、まとめとしたい。

1　遺跡の範囲について

和田遺跡の範囲については、本遺跡の南に隣接する和田の台II遺跡(第3図18)が重要な情報を握っているようである。和田の台II遺跡は、縄文時代(前～中期)と平安時代の遺物包含地として周知されている。ことに戦後の開田の際、多量の縄文土器が出土したという。両遺跡は、遺跡地図上では300m程の距離を保っている。しかしながら現地(水田、荒地)を踏査すると両遺跡間でも縄文土器、石器が採集できる。このことから、少なくとも縄文時代の「和田の台II」は、その遺物の分布から地図上の範囲を中心として、新しく採集された遺物とその地形から和田遺跡を北限とする範囲であることが想定できる。逆に言うと、弥生時代の「和田」の南限は和田の台II遺跡の範囲内には及ばず、東・西限についても範囲確認調査において和田遺跡と同一段丘面上で遺構・遺物を確認できなかったことと、北限は地形から見て本調査区であり、調査区外南側の舌(台)状台地先端部を中心とし、その段丘崖を南限とするおよそ2,000m²足らずと考えることができる。このうち、発掘調査した区域は、推定される遺跡全体から見ると、その北半部と言えよう。

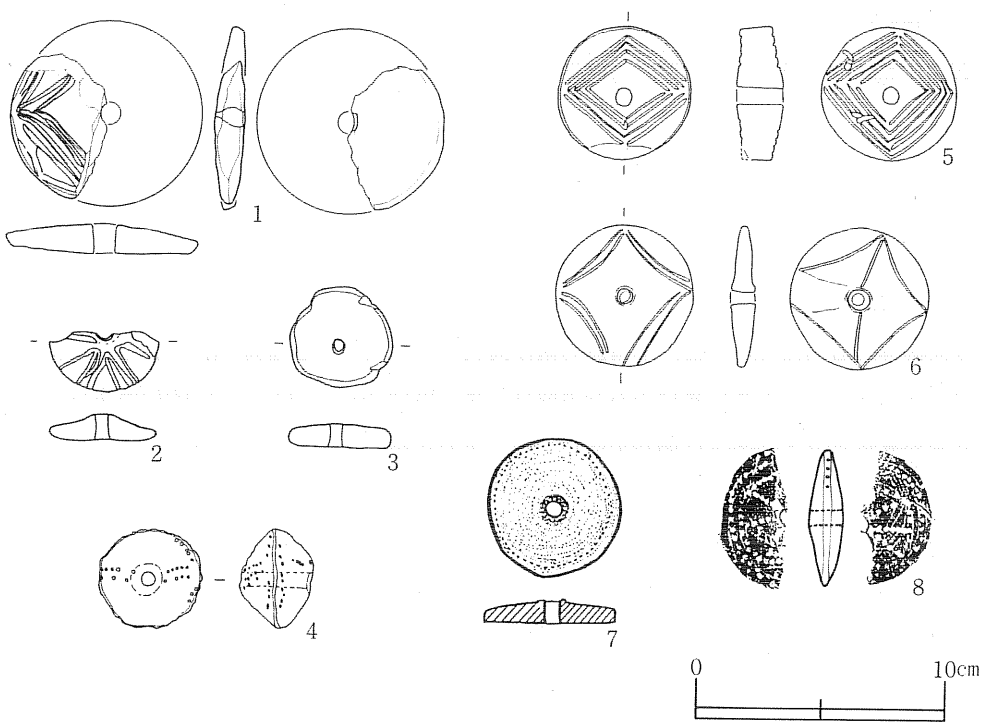
2　時期不明の土坑について

標記の土坑4基ＳＫ06・08・10・11は、その形態（平面・立面形)、堆積土の状況（特に最下層）が酷似していることからほぼ同一時期に構築・廃棄されたと考えられる。しかもこれらの土坑は台地平坦面から東に下る斜面に6ないし8mの間隔を保って緩い弧状に配置されている特徴をもつ。

この種の形態を示す土坑の類例を知らない。ただし、このような形態－平面円形、立面筒形－の土坑の坑底面に小ピットを有する「陥し穴」と想定されている遺構は近年類例が増えてき

ている。例えば、和田遺跡の南約2kmに位置する協和町半仙遺跡で4基、北西約9kmの河辺町石坂台Ⅳ遺跡で3基、それぞれ調査例が報告されている。本遺跡例において特徴的な周壁の段築は認められないものの、規模の点では三者とも近似している。

これらの類例から、積極的には言えないものの、遺構の占地、配置から和田遺跡の4基の土坑は、陥し穴としての機能を有していた可能性があると考えておきたい。



第19図　秋田県内出土の弥生時代の紡錘車

番号	遺跡名	径	孔径	厚さ	文　様	時　期
1	和田	7.5	0.9	1.2	沈線（片面）	後期
2	地蔵田B	4.4		1.0	沈線（片面）	前期前半～中期初頭
3	地蔵田B	4.2	0.6	0.9	無文	前期前半～中期初頭
4	地蔵田B	4.0	0.6	2.8	刺突（両面、側面）	前期前半～中期初頭
5	鳶ケ長根Ⅳ	5.4	0.7	1.8	沈線（両面）	後期（小坂X）
6	鳶ケ長根Ⅳ	5.6	0.6	1.0	沈線（両面）	後期（小坂X）
7	尾樽部	5.5	0.7	1.0	無文	後期（天王山～小坂X）
8	からみ山	5.5	0.7	1.4	刺突、沈線（両面、側面）	後期（小坂X）

3　紡錘車について

紡錘車は、織物（機織）に必要な糸に撚りをかけるためのはずみ車である。紡錘車は一般的には、弥生時代に入り農耕技術と共に大陸からもたらされたと考えられている。

県内で弥生時代に帰属すると考えられる紡錘車を抽出してみる。和田遺跡を含めて5遺跡で8例報告されている。いずれも土製であり、石製などは確認されていない。

左表を一覧してみると、外径の法量に3つのまとまりがあることが分かる。①径4.0～4.4cmの秋田市地蔵田B3例(註1)、②径5.4～5.6cmの大館市鳶ケ長根IV(註2)、小坂町尾樽部・からみ山(註3)の4例、③径7.5cmの協和町和田1例である。この法量の差は、時期と地域によって異なるのであろうか。径4cm台の①は、前期を中心とする時期、径5cm台の②は、後期で県北東地域に集中し、径7.5cmの③は、同じ後期でも県中央部と明確に分離できる。秋田を含めた北東北では紡錘車の出土例が少なく、言及の材料を欠くが、同じ東北でも出土例の比較的多い福島では、「紡錘車は作りや重量が、時期によって異なり、時期が下るにつれ、相対的に重量が軽くなる」(註4)とある。秋田の例では重量は不明確であるが、外径から判断する限りは、福島とは逆の数値を示していると言えそうである。

4　土器の年代と類例について

和田遺跡で出土した土器に与えられる年代は次のように考えている。第Ⅰ群土器は、縄文後期～晩期（中～後葉）であろう。

第Ⅱ群土器は、本遺跡の中心をなす。これらの土器は、地文（RL縄文、附加条縄文、L撚糸文）、文様などから弥生時代後期の「広義の天王山式」(註5)と考えられる。さらに個体数の最も多い第2類9種は、その附加条縄文、撚糸文のあり方から後期後半の小坂X式と称されている土器と言える。したがって弥生時代の遺構と想定している焼土遺構、柱穴状ピットについては、該期の構築と見て良いであろう。

和田遺跡周辺で天王山式期の遺跡としては、本遺跡の南東約4kmに所在する協和町中沢遺跡（第3図15）などを挙げることができる。また小坂X式期の遺構・遺物が検出されているのは、風無台Ⅱ遺跡(註6)、石坂台Ⅱ遺跡(註6)、上祭沢遺跡(註7)（いずれも河辺町）であり、いずれも土坑が各々1基、土坑内から1～数個体の土器が出土している。

また唯一文様構成の明らかな第13図22（第2類1種）は、個々の文様要素（沈線による楕円形文、孤線を用いた菱形文）では該期の土器の文様として採用されているが、このような組み合わせは知見の限りでは類例はないようである。ただ連続させた楕円形文を2段に配した構図をもつ土器は、小坂町尾樽部遺跡、山形県羽黒町高寺A遺跡(註8)に出土例がある。

註１　秋田市教育委員会「地蔵田Ｂ遺跡」『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1986（昭和61年）

註２　秋田県教育委員会「蔦ケ長根Ⅳ遺跡」『国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書』1981（昭和56年）

註３　安保彰『小坂のあけぼの　縄文期・弥生期』1975（昭和50年）

註４　いわき市『いわき市史』第１巻　1986（昭和61年）

註５　弥生時代研究会『「天王山式期をめぐって」の検討会』記録集　1990（平成２年）による「広義の天王山」の終末については弥生時代最終末まで含めた認識に立って使用されている。

註６　秋田県教育委員会『七曲台遺跡群発掘調査報告書』1985（昭和60年）

註７　秋田県教育委員会「上祭沢遺跡」『高速交通関連道路整備事業（和田御所野）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』　1990（平成２年）

註８　註５（佐藤嘉広「山形県における天王山期の現状と課題」）

1　遺跡周辺航空写真（1981.10.7 撮影、高度約1400m）

2　遺跡遠景（南→北）（台地縁辺の雑木林の中が遺跡）

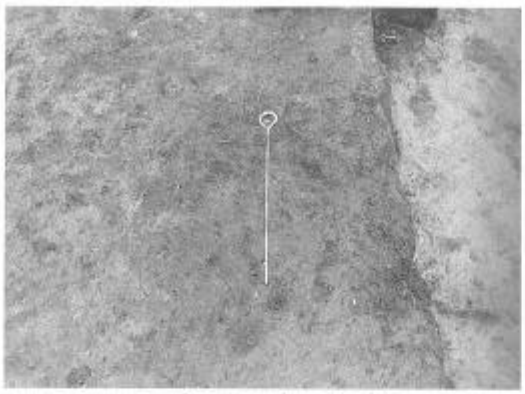
図版2

1　調査前全景(西→東)

2　調査風景(南西→北東)

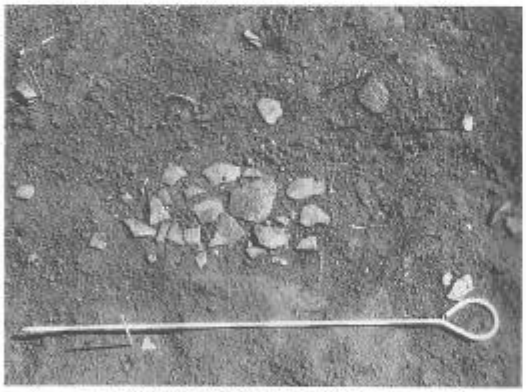
1　調査後全景(東→西)

2　調査後全景(西→東)

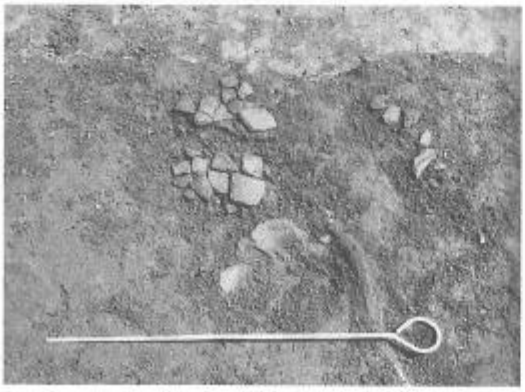


1　SN07　確認状況(北→南)

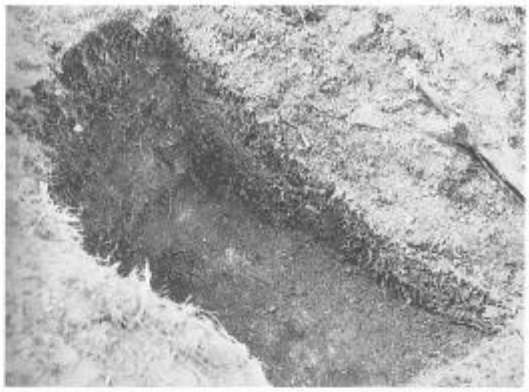
2　Aブロック遺物出土状況(南→北)



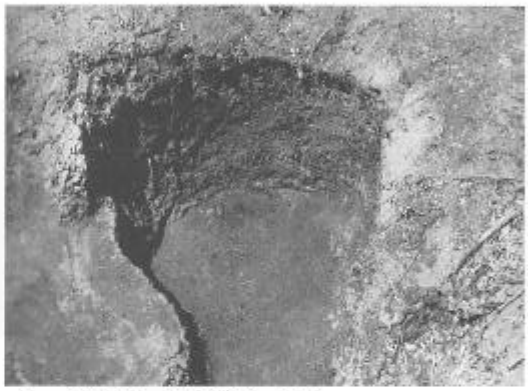
3　同上(第13図22)出土状況(北→南)



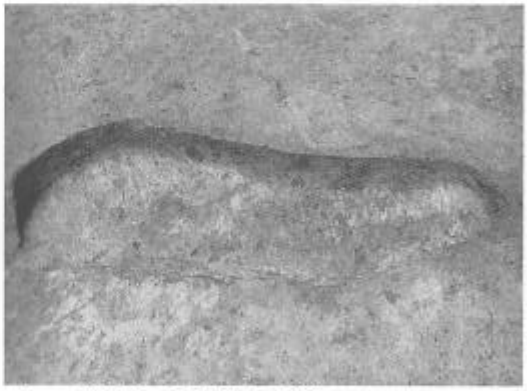
4　B-1ブロック遺物出土状況(北→南)



5　SX04　土層(南→北)

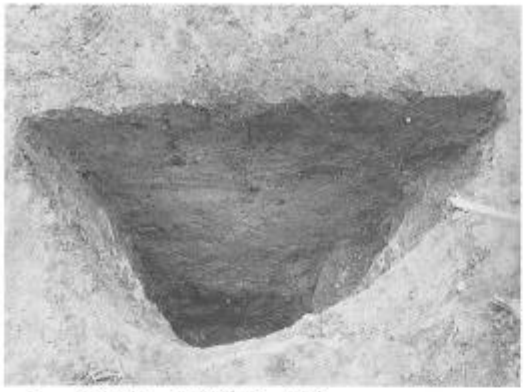


6　SX04　完掘(東→西)



7　SK02　完掘(西→東)

8　H-2ブロック遺物出土状況(東→西)

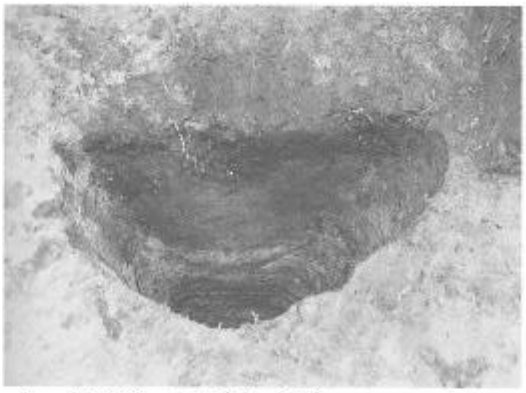


1　SK06　土層(北→南)

2　SK06　完掘(西→東)

3　SK08　土層(北→南)

4　SK08　完掘(北→南)



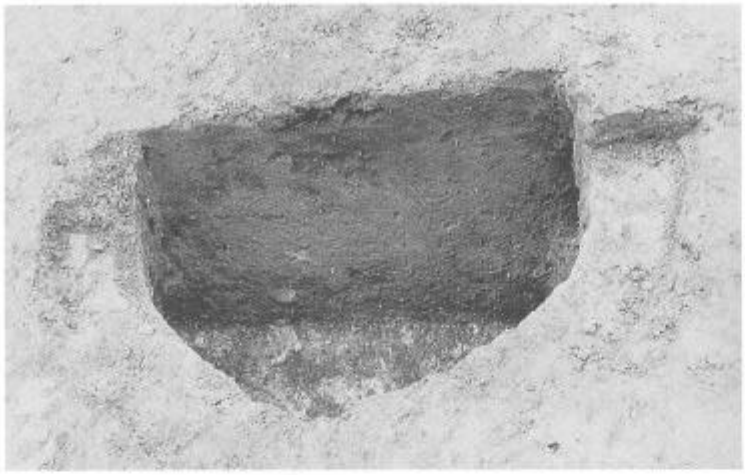
5　SK10　土層(東→西)

6　SK10　完掘(西→東)

7　SK11　土層(南→北)

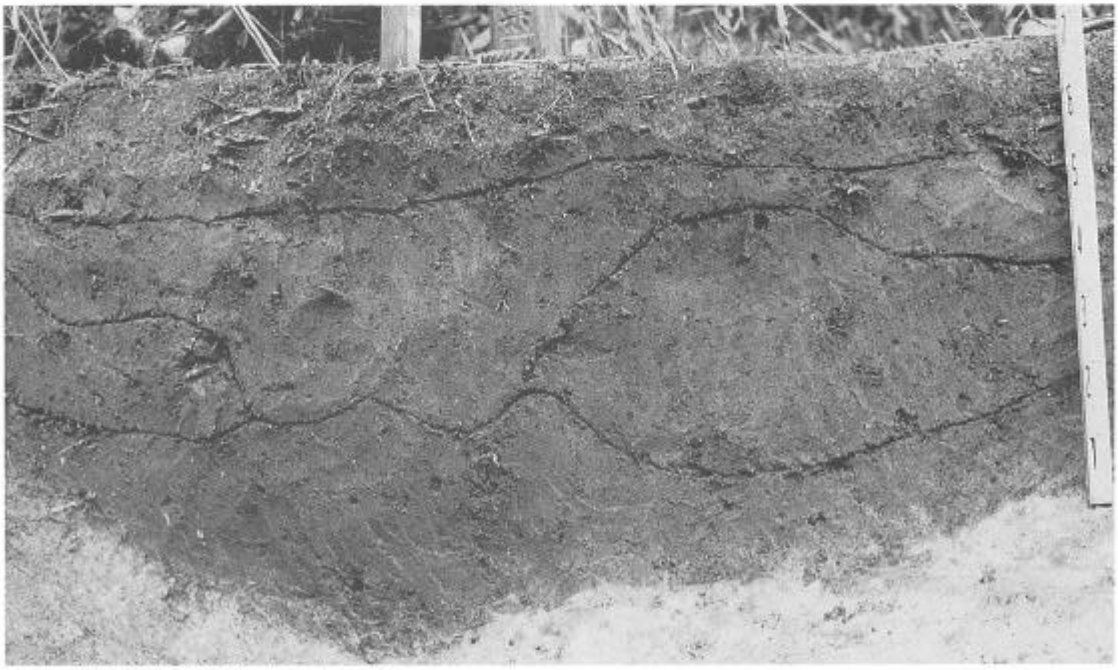
8　SK11　完掘(南→北)

図版6



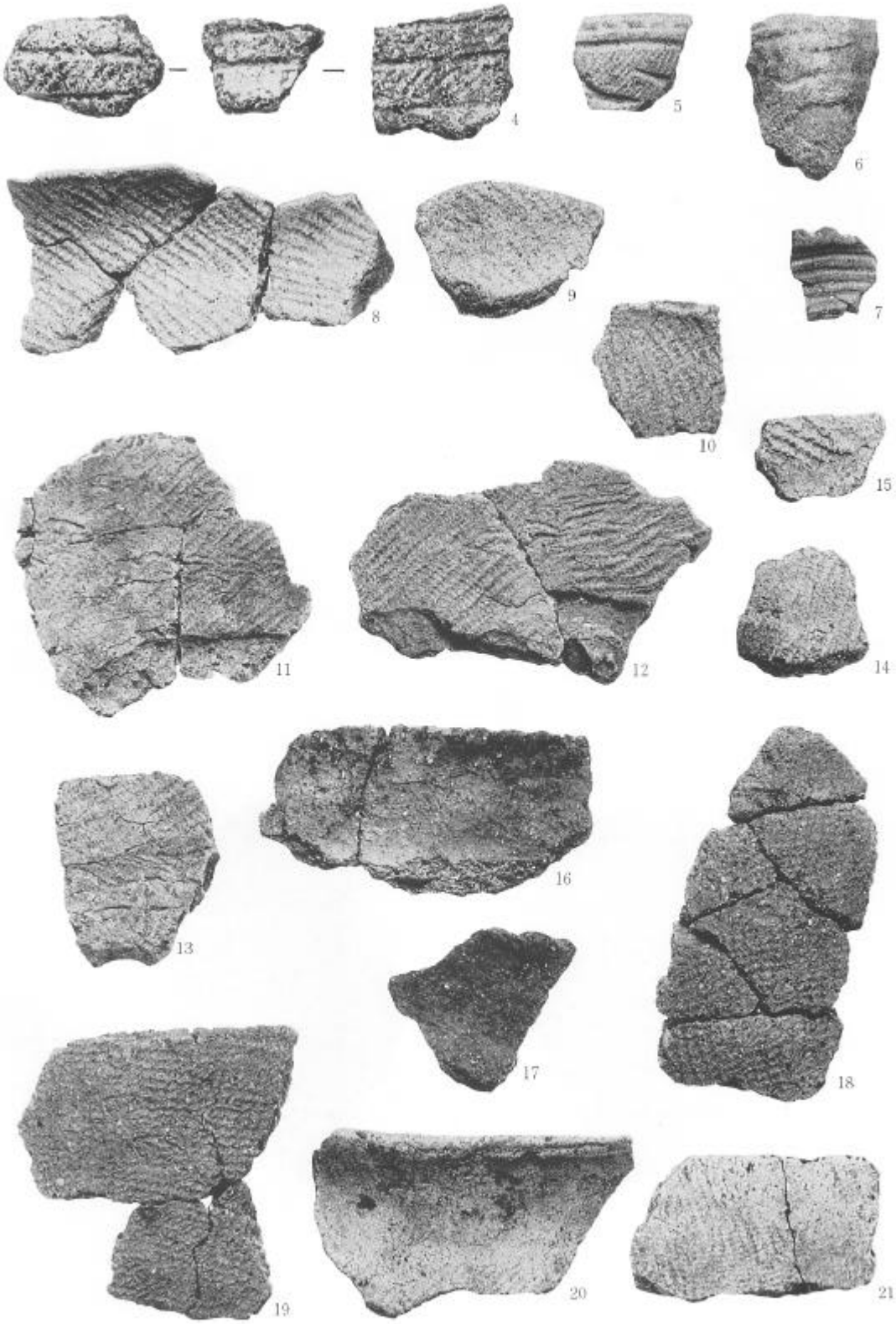
1　SKF09　土層(東→西)

2　SKF09　完掘(東→西)



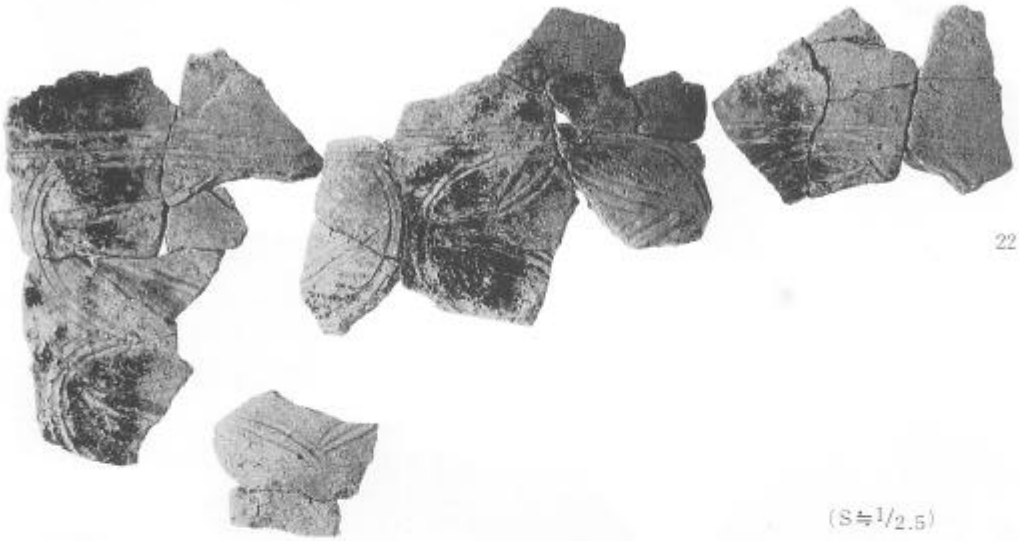
3　遺跡基本土層(L16、南→北)

図版7



(S≒1/2)

図版8

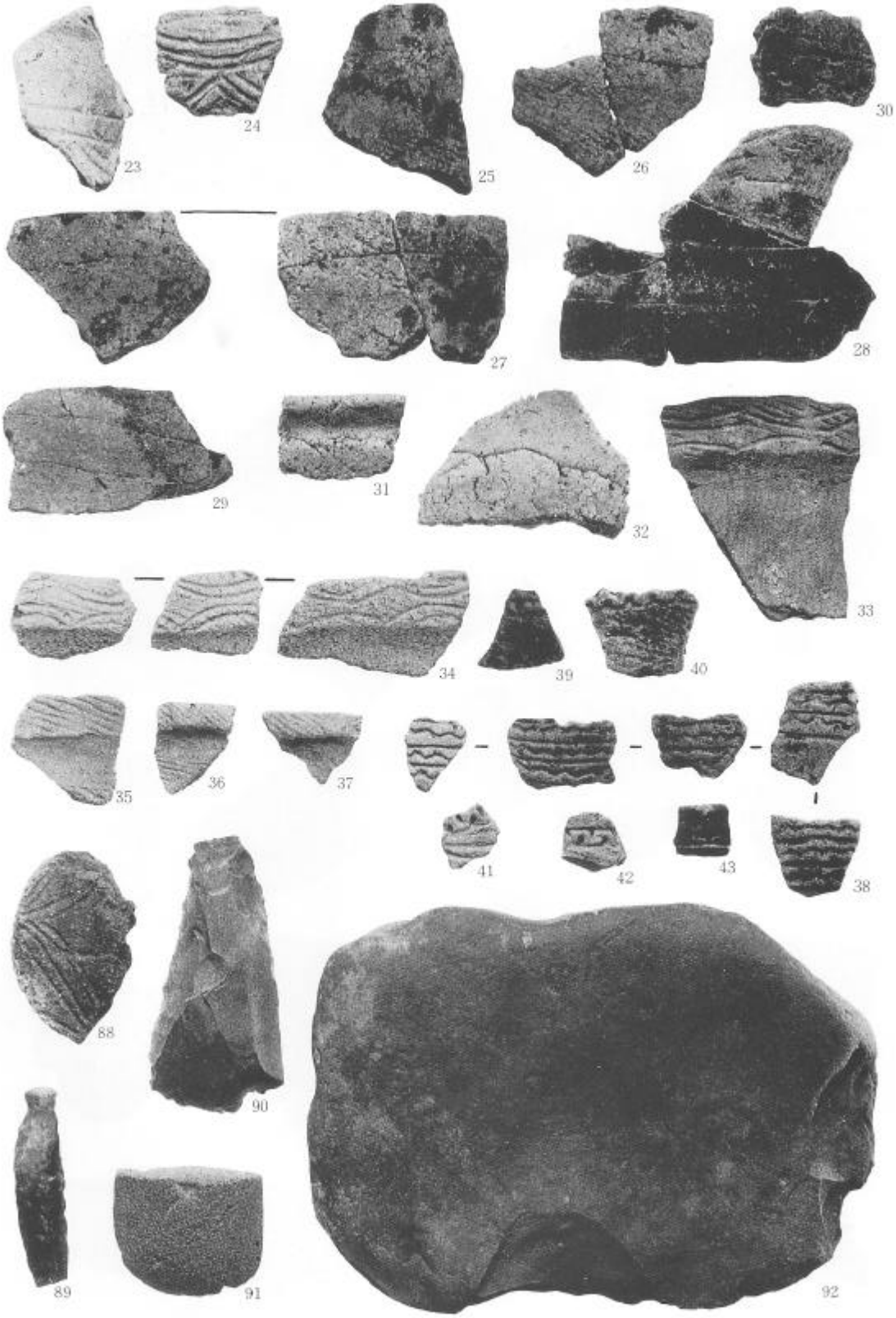


22

(S≒1/2.5)

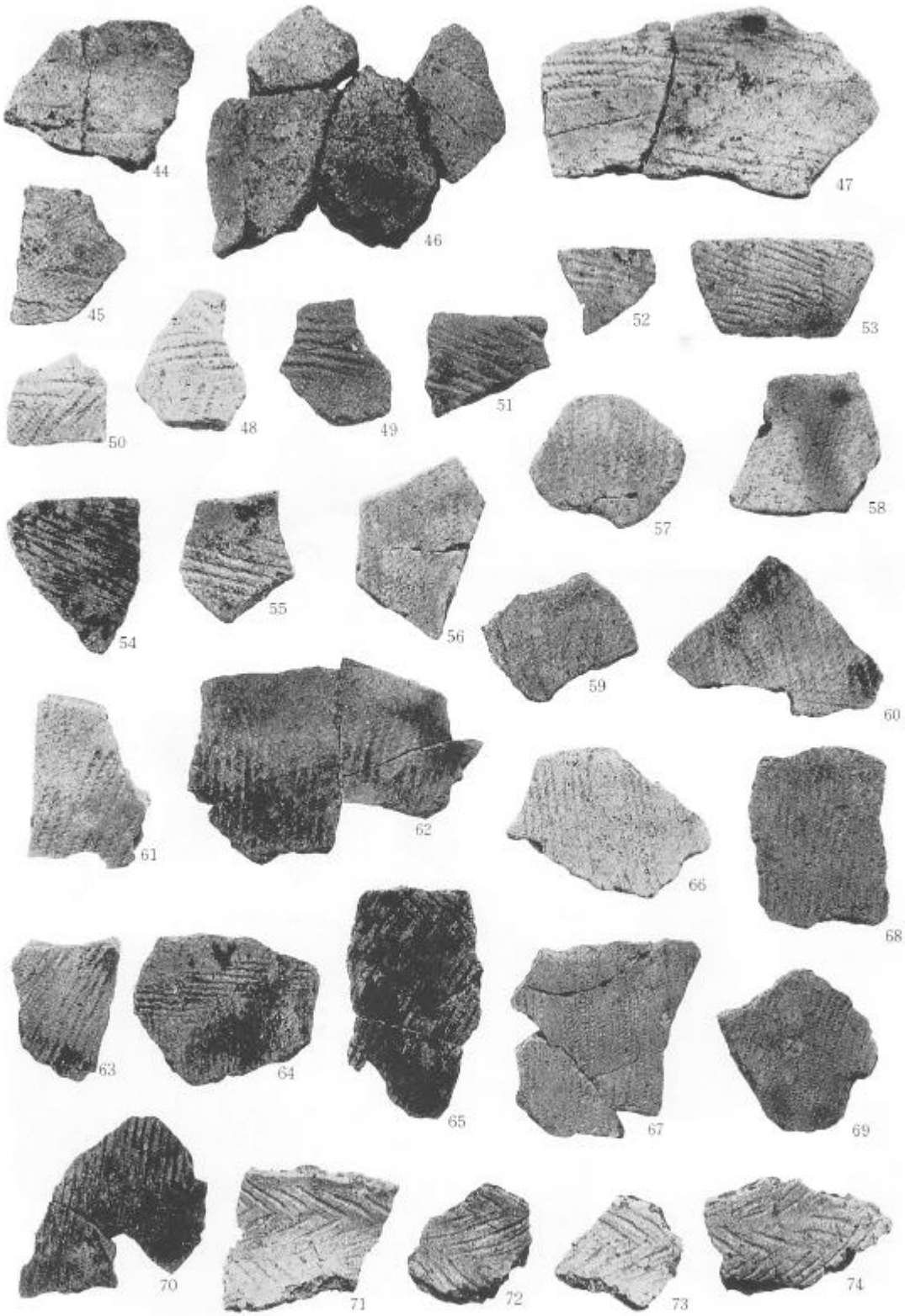
88

(S=1/1)


23
24
25
26
30
27
28
29
31
32
33
34
39
40
35
36
37
41
42
43
38
88
90
89
91
92

(S≒1/2)

図版10


44
46
47
45
52
53
50
48
49
51
57
58
54
55
56
59
60
61
62
66
68
63
64
65
67
69
70
71
72
73
74

(S≒1/2)

あ　と　が　き

野外の発掘調査並びに室内の整理作業に従事下さった方々は以下の通りである。本書が成るにあたって欠くべからざる方々であり、末筆ながら記して感謝を申し上げる。

《発掘作業員》

阿部喜久雄　阿部義之助　石井　光雄　石崎　龍光　伊藤　利雄　奥田勘一郎
加賀谷光雄　小山　実　佐川　忠一　進藤　忠　進藤長之亟　進藤　弘
進藤　正国　進藤勇太郎　武藤　長雄　山田　義男　加賀谷キヨノ　鎌田　栄子
後藤ミツエ　小山　キヨ　佐藤スギ子　武田トミエ　(50音順)

《整理作業員》

大西　英子　高橋江美子　町田　京子

秋田県文化財調査報告書第212集

和田遺跡発掘調査報告書

県道協和・松ケ崎線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

印刷・発行　平成３年３月

編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014 仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地
ＴＥＬ（０１８７）６９－３３３１

発　　行　秋田県教育委員会
〒010 秋田市山王四丁目１番２号
ＴＥＬ（０１８８）６０－３１９３

印　　刷　合資会社　精巧堂印刷所